◇ 特別寄稿 ◇

墓葬と風水

―― 宋代における地理師の社会的位置 ――

廖 咸恵 (翻訳:上內健司)

◆要 旨

本稿では主に、宋代における墓葬風水の発展、及び士人がその中で演じた役割を通して、儒学と術数の間の相互的な交流と影響を観察する。特に、両者の相互交流が、術士グループの社会的ステータス、風水技芸の学に対する儒士の認識、さらには「儒」・「術」間の社会的・文化的境界に与えた影響に焦点を当てる。そして、宋代の風水術数が、士人たちの強い関心と密接な干渉の下で、次第に「小道末芸」といった周辺的地位から脱却し、儒者が備えるべき重要な知識の一つになったことを論証する。このような変化は士人の認識の上だけでなく、彼らの行動においても具体的に現れていた。同様に、地理師もまた士人顧客の注目を集めるために、彼らの行動や術数を士人の文化的な好みに合わせることに腐心し、それによって彼らに対する士人の評価を変化させた。こうした士人と術士の変化によって両者の社会的・文化的距離は縮まっていき、彼らの文化的特徴を再構築していったのである。注目に値するのは、宋代士人の地理や技芸に対する参与と認知が、後に苦境に立たされる元代士人のための活路を切り開いたということである。

キーワード:墓葬、風水、社会流動、宋代士人、葬師

はじめに

中国人は早い時期から墓葬風水に対して関心を持って いた。少なくとも漢代にはすでに子孫の命運は先祖を葬 る土地と関係しているという考え方が存在し、それが次 第に当時の人々の墓葬風水への関心に影響していったと されている。この理論と実践は、魏晋から隋唐にかけてさ らに発展していき、宋代には一種の社会的に普及した信 念と実践となっていた1)。歴史的変遷という観点からみ れば、墓葬風水が宋代において広く受け入れられた原因 は理解に難くない。唐宋変革の中で、門閥貴族の政治専断 と文化的基礎が大きな衝撃を受け、社会階級間の垣根が 次第に崩れていったために、個人や家族の興廃を左右す る墓葬風水や、その他の予言や運命を変えるような各種の 術数が、流動と開放へと向かう宋代社会において、大き な魅力と説得力を獲得したのである。宋代社会の流動性 の実態についてはさらに多くの研究が必要であるが²⁾, 確実に言えることは、社会流動の可能性が出現し、それ が普遍的に認識され期待されるようになったとき、個人 や家族の地位の上昇を助けるあらゆる手段として、発展 し広がっていく余地があったということである。求神問ト・算命測字から看相扶箕に至るまで、様々な術数と術者が、宋代において顕著に普及と成長をみせており³⁾、歴史的変遷のもとで生じた階層の流動性が、当時の社会構造に直接波及しているのみならず、当時の人々の生活に深く影響を及ぼしていたことがうかがえる。

しかし、墓葬風水の信念と実践が宋代人の生活の中で 見慣れた風景となったとき、その背後にある葬地禍福の 理論が実現されたかどうか、換言すれば、実践した者の 求める社会的地位の上昇が達成できたかどうかについ て、全面的に検証することは難しい。なぜなら、支持者 と反対者がこの問題についてそれぞれ意見をもち、その 立場も異なっているからである。現存する史料によると、 支持者は墓葬風水が子孫の禍福を左右するという信念の もとで、積極的に地理家や葬師(これら呼称の問題につ いては、以下に検討する)の助力によって葬地や日時を 選んでいただけでなく、後日の幸運が葬地の風水の影響 に起因するものとして、葬師の分析を証明し、合理化し ようとしていた。逆に、反対者はそれらの信念や実践を 排除するのみならず、多くの方面で墓葬風水の有効性と 必要性について反駁していた。最もよく見られるものと しては、人倫孝道から始まり、風水の吉地を探して自己と子孫の利益を図るがために、肉親の棺を久しく埋葬しないことを批判したり、死んで骨となったものがどうして子孫を幸せにできるのかとその可能性を問いただしたり、さらには葬地風水をただの巫者の妖妄利己の説であるとするものまであった⁴⁾。現存するこのような立場を異にする史料から、我々が墓葬風水の有効性を明確に判断することは難しい。さらに重要なのは、こうした判断が墓葬風水の作り出した社会流動の効果を明らかにする助けにならないことである。我々にわかることは宋代において墓葬風水が相当に流行しており、そのために歴史的記載の中に多くそれを支持し、実践した例証が残っていること、同時に社会の風習に与えた影響が大きかったために、伝統的な儒家がつとめて排斥していたということだけである。

葬地風水が子孫の禍福を左右するかどうかについての 意見が人によって異なり、かつそれを確実に証明する方 法がないにもかかわらず、それが当時の従事者(葬師や 地理家など) 自身の組織と社会的地位に対して微妙に影 響していたことは興味深い。この点はさらなる検討に値 する。彼らの出自や言行を詳細に観察すると、宋代の風 水術士は決して反対者のいう「鄙陋無知」や「野師俗巫」 として概括できるものではなく、様々な社会的背景から 来ており、その中には儒学的背景を持つ知識人工リート も少なくなかった。言い換えれば、従事者自体は決して 職業が同じであるために、同じ形態と地位をもった社会 的集団を形成していたのではない。反対に、多くの背景 を異にする人々がこの職業に就いたために、この職業集 団が拡大していく過程において、次第に量的変化が質的 変化をもたらし、その社会的地位にも影響を及ぼしたの である。また、彼らの社交ネットワークの状況からみる と、彼らの顧客は一般的な市井の民に限らず、広大な儒 家知識階層をも含んでいた。顧客の多元化、特に少なか らず社会的エリートを含んでいたことは、裏を返せば墓 葬風水が普及し、 当時のあらゆる社会階層に是認されて いたことをあらわしている。さらに注意すべきは、彼ら と士人顧客との関係は、決して単純でその場限りの技術 売買ではなかったことである。多くの例証があらわして いるように、宋代における風水術士と儒士の間には、長 く、また深いよしみと知識交流があったと考えられる。 こうした人間関係の構築や、そこに含まれる知識交流か ら、少なくとも風水術士の一部は当時の社会エリート階 層との接近を通じて、社会の周辺としての地位を次第に 変化させていった。そして彼らの持つ専門的な技能も、 一部の士人の眼中では次第に単純な技芸の学から深い意 味を持つ学術知識になっていった。

当然ながら、墓葬風水が術士の集団自体に及ぼした社 会流動の効果を探るためには、いくつかの重要な側面に

ついて分析・検討を行わなければならない。まず、宋代 の社会構造と、いわゆる「社会流動 (social mobility)」の 問題である。宋代の歴史的発展と社会構造の変化に関し ては, 二十世紀初頭の日本の学者内藤湖南の研究以来, 「唐宋変革」のテーマをめぐって、多くの学者によって研 究が継続的に進められ、現在もまだその進展中である⁵⁾。 そうした中で、「社会流動」という言葉の持つ意味と広 がりについてはなお議論があるものの、多くの学者がそ れを宋代社会の特徴の一つだと認めている。しかし、い ったい「社会流動」とは何であろうか。特に宋代社会の 中で生活する人々にとって、上昇移動はどのような意味 を持ち、どのような可能性を持ち、当時いかなるルート によって自身の地位の向上を達成したのであろうか。次 に、風水術士の質と量における変化と、彼らと儒士の間 の交流の問題がある。先に述べたように、風水術士集団 の質と量の変化を検討するためには、それを当時の歴史 的状況の変化の中で観察しなければならず、その重要な 点は変化の方向性とその後の効果にかかってくる。すな わち、風水術士の量的な増加と質の変化は、彼らの活動 方法と奉仕対象や態度にどのように影響し、その社会と 文化のイメージを再構築したのかということである。ま たそれに関連して、彼らと儒士の間の密接な往来と接触 は、どのような情況下で展開し、互いにどのような立場 や観点を持ちながら行われていたのであろうか。本稿で は以上の問題について論証することを目的とする。

詳細な検討に入る前に、まず本稿の検討対象の呼称に ついて説明を加えたい。「風水」という言葉は、晋の郭 璞の『葬書』中にある「得水為上、蔵風次之」に由来す る。しかし、その言葉は次第に陰陽に従った家相を占う 言葉の総称となり、他にも早くから出現していた卜宅相 地・堪輿図宅・青嚢青鳥. あるいは形法地理といった諸 術の要素をも包括していった⁶⁾。このような変遷がもた らした影響の一つに、後世におけるこれら関連する技術 者に対する名称の多様化がある。現存する宋代の関連資 料の中で、当時の人々は墓葬風水の専門技能を有する者 に対し統一された明確な呼称をもっていない。「山人」・ 「葬師」・「墓師」・「巫史」・「相墓者」あるいは「卜葬者」 等のよく見かける呼称から、善相地 (脈)・精堪輿・明 地理・雅青囊術・好陰陽風水等の形容詞にいたるまで多 種多様である。しかし、かくも多くの異なる呼称がある ものの、文脈から理解すれば、これらの間に実際には高 度な互換性があり、また宋代人についていえば、それら が指し示す対象は明らかに墓葬風水を処理する技能を持 つ人そのものであった。よって、本稿の表題では「地理 師」という言葉を採用しているが、実際には上述した各 種呼称で呼ばれる人々を検討の対象とし、文中でもそれ ぞれの呼称に従って表記していくこととする。また、風 水術士などの技能者を研究するときに直面する最も重要

な問題として、史料が断片的であり、偏っていることが ある。過去に行われた多くの関連研究と同じく、本稿で 採用する史料の多くは士人が残した記載である。なぜな らば、少数の術者が残した専門的な著作をのぞいて、大 部分の当事者が、ほとんどその重要な記録を残していな いからである。しかし、本稿が従来の研究と異なるのは、 こうした士人の間接的記載を通して、風水の術数や術士 そのものを研究するということを目的としているのでは ないというところである。本稿では、儒士と風水術士の 間で行われたさまざまな往来の情況から、術士がいかに 士人との接触・交流を深めていき, 文化的イメージと社 会的地位を変化させていったかを分析する。同時に、儒 士による詩文の往来や論述から、宋代儒士の風水術数や 術士に対する評価の変化と、それにともなう儒・術間の 社会的・文化的境界線の解消について明らかにしたい。 よって、本研究において、宋代士人の記載は、間接的で 歪曲された情報としてではなく、重要かつ直接的な研究 の手がかりとなるのである。

社会構造と階層流動

唐宋変革論の中でも、社会の方面における変化の最も 重要なものは、内藤湖南の提起した門閥の終焉と平民の 台頭である。つまり、宋代ではより開放され公平になっ た科挙制度に加え, 学校教育が県レベルにまで普及した ことによって、人々は教育を受けて応挙し、仕官する機 会を得ることができるようになった。そしてもともと少 数の門閥貴族が壟断していた政治的・文化的資本が、広 く一般民衆に開放された後は、個人の出身や血縁の如何 を問わず、教育を受けて科挙に及第した者はすべて官僚 となって大幅に自身の社会階層を上昇させることが可能 になったとする説である7)。これに対し後に続く研究者 は修正を加えてゆき、宋代社会は必ずしも単純に「平民 の台頭」という図式によって描き出されるものではなく. 少なくとも内藤湖南のいうように寒門出身者が一朝一夕 のうちに科挙に及第して国家の認めるエリートとなるこ とはないとした80。この新しい観点では、たしかに社会 流動は発生したかもしれないが、それが現れるまでには より長い時間と、より複雑な過程を経る必要があったと する。さらに重要なのは、仕官することは個人と家族の 社会的地位を上昇させる重要な手段ではあったが、それ は唯一の手段ではなく、また決して容易なことではなか ったということである。たとえば、宋代の家族を扱う研 究者は、士人の起家は往々にして数代にわたる不断の努 力の積み重ねによってはじめて成功していたとする。通 常は、まず家庭の財力を蓄え、その資財の一部を蔵書と 教師の招聘に費やし、 資質のある子弟を育成して科挙に 応試させるという過程を経なければならなかった。またこの期間中には、家中の子弟が科挙試験で及第できるか否かにかかわらず、他の資財や名望・地位を持つ者と強固な人間関係のネットワークを作っておかなければならなかった。婚姻関係を結び、教育資源を分かち合い、密接な社交関係を保つなど、これらすべて宋代によく見られた実力を蓄える方法である。たとえ結果として子弟が入仕することができたとしても、かれら個人とその家族は継続して地方の経営をしつづけなければならなかった。地方の指導者とエリートという地位をみずから維持し、下降移動を免れるために、地方の慈善・文化・宗教など各種の事務について熱心に支持・参与し、また同時に地方と政府を結ぶ媒介としての役割を積極的に演じていたのである90。

このような修正点からみれば、宋代社会の変化に対す る研究者の認識は、従来の「平民の台頭」から、士人身 分の再生産と彼らが次第に地方エリートになっていく過 程へ転じたといえる100。両者の共通点は、「士」が社会 階層の頂点であり、上昇移動の最終目標だったことであ るが、異なる点は「士」の定義とその身分の獲得方法で ある。前者の論ずる「士」には、明確な定義と獲得のた めのルートがあった。つまり、科挙に及第して仕官した 者は、国家の制度によって認められたエリートとなるの である。よって、宋代の科挙による人材登用というメカ ニズムのもとで、個人の才識と能力が自身の社会的地位 を決定づける最も肝心な要素であったとする。一方、後 者の論ずる「士」は、普遍的な社会的認識の上に成り立 っており、明確な法律や政治制度によって画定されるも のではない。ここで士と称される者とは、通常儒教の経 典の教育を受け、(成功の如何を問わず) 仕官を志し、 儒教の儀礼に習熟し、その他の官員や名望・地位を持つ 者と密接なネットワークを維持する者である。士の身分 は制度的な判断基準や保障をもっていないために、たえ ずさまざまな経営方法を通じて、特に個人と家族の地方 における地位を確固たるものとし、さらに持続的に家族 から仕官する者を輩出して, はじめてその士の身分を維 持できたとしている。以上をまとめると、前者の論述に おいて、宋代社会の上昇移動の開放性とは、庶民身分か ら士・官へ転ずる機会の開放を意味している。後者は社 会流動を段階的なものと考え、その庶民から社会に認め られる士となる機会はすべての人々に等しくあったが. 実際には相当の財力・実力・精力・そして人脈を有し て,はじめて達成できたとする。そして仕官できる者は, 得てしてすでに社会で「士」の地位を有していた者であ る。社会的地位の上昇は必ずしも官僚となることを必要 としないが、しかし仕官すれば往々にして「士」として の身分と地位を揺るぎなく持続させることができたので ある。

以上から明らかなのは、「士」の定義については大き く食い違っているものの、宋代の社会流動に対する研究 者たちの見解は、平民でも「士」になる機会があり、自 身の社会的地位を上昇することができたという点におい て一致していることである。また、どちらの「士」にせ よ, 儒教経典の教育的基礎をもち, 仕官を志し, (科挙 試験もしくは社会において)儒家の理念と特質を実現す るという特色をもっていた。問題は、もし宋代における 社会的地位の上昇が、ただ個人が国家あるいは社会の認 める「士」となることを意味しているならば、この種の 流動はつまり単一化や儒化を経る、非常に排他的なもの だということである。なぜならば、たしかに宋代社会で は仕官のルートが開放され、科挙に応試する者が急増し、 競争も激化するという現象が現れたが、おそらく多くの 人々にとってはなおリスクが高く負担も大きい投資であ ったために、彼らは自然とこうした上昇移動の道から排 除されていたのである11)。さらに、多くの人々にとって 自らの職務を守ることは、生計を立てるよりよい、ある いは唯一の選択だったが、それが彼らに「士」の身分と 地位への努力へと向かわせず、社会的地位を上昇させる 機会を逸することとなった。言い換えれば、現在宋代の 社会構造と社会流動の論述と分析において、なお一つの 盲点が存在し、社会流動の意義とその一般人に及ぼした 影響についての理解を妨げているのである。同時に、そ れまで厳然と存在した階層間の壁がなぜ宋代に打ち壊さ れたかについても疑問が生ずる。本稿で検討する風水術 士は、如上の観点のもとでは、おそらく社会の低層に位 置づけられ、上昇も難しい集団であろう。

本稿では,「士」が宋代において優位な地位を有して いたことを否定するものではないが、「士」の行動や価 値観を詳細に観察してみると、宋代社会において実は他 にも間接的なルートが存在しており、当時の人々が自身 の社会的地位を上昇させる選択肢となりえたことがわか る。こうした選択肢は、当時のあらゆる社会階層の人々 に対し、本業を捨ててまで儒学の習得をする必要はない という前提のもとで、なお自己の社会的地位を上昇させ る希望を持たせ、さらには地位が改善する可能性を明確 に示すことによって、積極的な希求と実践を促した。注 目すべきは、これら併存するルートは決して「士」階層 と無関係だったわけではなく、社会エリートと密接に関 係していたことである。というのも、士人は前代の貴族 のように閉ざされた集団ではなく、社会の各階層から起 こってくるものであり、また積極的に当時の社会と密接 な相互関係をもっていたために、彼らの動向と態度も非 常に影響力をもつ評価の指標となり、また一般大衆が自 己の地位を改善するために努力し獲得できる対象となっ ていた。これまでの研究においてすでに指摘されている ように、このような国家や社会に普遍的な認知される 「士」は、宋代のエリート階層となったのちに、非常に 高度なアイデンティティを持つようになるだけでなく, 自ら受けた儒教的教養によって、制度的もしくは非制度 的なルートを通じ、政治・社会・文化等の領域に影響を 及ぼし、そこに入り込んでいた。北宋期における「有為 政府 (activist government)」の概念とその実施、そし て南宋期における個人道徳と社会秩序の推進は、そうし た儒家の経世理念が政治と社会の局面において異なるか たちで現れているのである¹²⁾。この他,彼らの政治的・ 社会的影響力が強まるにしたがって、宋代の「士」はま たその触覚を, 長らく儒教の正道の範疇外に追いやられ, 抑圧されていた知識の領域へと伸ばしていった。その目 的は、儒学の権威や影響力を拡大することではなかった にせよ、少なくとも彼ら自身の信奉する儒家理念を、そ うした「末芸小道」に注入することにあった。このよう な儒士によって「関心」を向けられ、「浸透」し、 さら には「改造」された知識の領域は、その過程の中で「儒 化」の憂き目をこうむることとなったが、これによって この知識の領域と媒体は次第に「士」の注目、是認を獲 得し、さらにはより踏み込んだ参加をも促したのである。

宋代において儒学の「浸透」を最も顕著に受け、かつ 現代の学界の注目を浴びているのは、武学と医学という 二つの知識の領域であるといえる¹³⁾。「儒将」や「儒医」 という名詞自体が宋代に出現し普及したということから 見ても、儒化の明らかな痕跡がうかがえる。これら二者 の出現した情況と過程は異なっているが、その中で宋代 の新興エリートが重要な役割を果たしたことは共通して いる。まず、武学の方面において、宋代は建国当初から 重文軽武をめざし、文治と儒学を尊ぶ方向で発展したと はいうものの、軍事と武力への関心は決して失われては いなかった。太祖と太宗が南北の各独立国家を統一する ため継続的に軍事行動を行い、さらに真宗期は辺境に重 大な武力的脅威を受けていたために、宋朝は軍隊の統率 や将帥の選抜、軍事訓練などの議題に直面せざるをえな かった。このような状況下で、唐代の武挙(試験によっ て武官を選抜すること)を復活させ、それにともなって 武学も設立された。現実の軍事問題に対応する以外に, 武挙と武学の実施はまた、当時の文人がそれによって文 武合一を実現し、儒家の価値観や理念を体現する重要な 舞台となっていたことである。「儒将」の語がみえるの は宋代が初めではないが、宋初においてその語がもちい られる時、その背景にはそれまでの文・武間の対立によ って、文官が軍事に疎くなり、武官による専断をゆるす 結果となるのではないかという疑惑から、儒士たちがこ の語に良将の新しい定義を与えようとしたことが見てと れるのである。宋代の文人の目に映る優秀な将帥や兵を 統率する大任を負うにたる者とは、道徳的素養を持ちあ わせ、主君に仕える道を理解し、経典の知識を熟知して

謀略をそなえるような者であった¹⁴⁾。このような基準に合致する者は次のような二種類の人物しかいない。一つは、もともと文人の儒士であるが、軍事的な知識や謀略を兼ねそなえ、君主が兵権をあたえる対象となるような者。もう一つは、もともと軍人であるが、読書を重ねて経典の知識を蓄え、「智略」を有することができた者である。いずれにせよ、その重点は「武勇」から「智略」へと転じており、その「智略」の源と基礎は経典の知識であった。

宋代の文士の武挙や武学に対する理想は、実践の課程 において阻害され、ねじ曲げられ、特に文挙に挫折した 士人が転向して官を求めるルートへと次第に変化してい ったために、良将を育て、選抜するという当初の目的は 達成されなかった。とはいえ、こうした理念は武挙や武 学そのもの、そしてそれに参与した者に対して莫大な影 響を及ぼした。実際に研究者の分析するように、武挙と 武学は表面上において文挙や文学と平等な地位を獲得し たにすぎなかったにもかかわらず、当時多くの文士がそ れへの参与に関心を示していた。文挙に挫折した者にと って、ルートを転換した後も仕進の機会が大幅に増える だけでなく、後に機会をえてまた文階へもどることもで きたのである。さらに興味深いことは、武挙による進士 自身も次第に自らを「士大夫」とみなすようになり、ま た一般の文士からも書生や士大夫として扱われるように なった¹⁵⁾。詳細に宋代の武挙と武学の理想および実践の 状況を観察すると、儒家文人が与えた深刻な影響がその 中に見てとれる。まず、文官と同じく、武官にも豊富な 経典の知識が要求され、同時に筆記試験もその選抜の過 程において必須となった。そのため、文・武官の知識的 背景の格差が次第に縮まっていき、その価値観と理念も 同化していった。同時に、それにともなって両者の間の 社会的地位も接近していったが、これは武官の地位が上 昇したともいえる。次に、二者の格差が縮小するにした がって、文士が武挙に転向するルートが開かれた。武挙 はより多くの仕官の機会を提供し、さらには武挙進士が 最終的に文官へと転任することも望めたために、多くの 文士がこのルートへと関心を寄せ、邁進していった。こ のような状況が宋代の軍務に多大な悪影響を及ぼしたこ とはさておき、上に見てきたように、文士が付与した定 義によって「儒将」の理想的イメージが形作られ、同時 に文士がその中に参与することによって、武官の量的・ 質的変化を引き起こし、さらには「士大夫」としての自 己認識と社会観念をも出現させた。この微妙な変化の過 程で、文士の武学への浸透、そして武学の「儒化」が見 てとれるが、それがかえって武官の地位を上昇させるこ ととなったのである。

上述の「儒将」の例とくらべ、「儒医」の形成はより 宋代社会に存在する流動のルートを明らかに示してい

る。武挙出身の進士の多くは文官系統へと転向したこと によって、自らを主流である「士大夫」の列に入れよう としたが、「儒医」の多くは医者の身分によって士庶の 賞賛と尊敬を獲得していた。また医学の知識は士人に再 評価されたことによって、学習し生涯を捧げるにたる領 域となったのである。「儒医」の概念の出現と普及の過 程については、さらに多くの研究を待たなくてはならな いが、確実にいえることは、その形成において当時の儒 士の影響を深く受けていたことである。「儒将」と似て いるのは、「儒医」とよばれる者もまた大きく二つの種 類に分けられることである。一つは比較的早く出現し, また比較的狭義の「儒者為医」という者である。その出 現した原因と宋代における医薬領域の発展は密接に関係 している。宋初以来の皇帝個人の関心と仁心、そして有 為政府の概念によって、宋代においては政府主導の重要 な医薬改革が多く行われた¹⁶⁾。その中でも医者の素質の 向上は主要な問題の一つであり、医学の経典の研究と試 験、臨床治療の実行と経験、そして儒者にたいする医学 の奨励など、これらすべてが医学の質を改善するために とられた処置であった。現在目にすることのできる「儒 医」の用例のうち、最も早いものは、北宋後期の関連す る官撰の医学史料の中にみえる。それが普及するのは南 宋期で, その指す対象も次第に「有儒者風範之医者」, つまり医療の専門技術をそなえ、かつ儒家の行動・道徳 規範に合致する者へと拡大していった17)。換言すれば、 「儒将」と同じく,宋人が医者の質を改善していく過程で, 従事者に対する要求から、儒者が直接的に介入・管理す るようになり、それが従事者自身の儒学的素質を向上さ せる傾向へと転じていったのである。これまでの研究に おいても「儒医」の出現は、医学が重視されはじめ、さ らには医者の社会的地位が明らかに上昇したことのあら われであると指摘されている¹⁸⁾。

基本的に「儒医」と「儒将」の現象やこれらについて の研究によって、宋代社会には「士」のほかにも、まだ 地位上昇のための別の可能性やルートがあったというこ とがわかる。すなわち、いかなる知識や技芸の領域であ っても、宋代士人の認知もしくは参与を獲得できれば、 その知識や技芸自体とその担い手もまた往々にして間接 的に社会的地位の上昇という利益を獲得することができ たのである。しかしながら、その中にもまださらに考え なければならない問題がある。なぜ宋代文人の武学や医 学を改善する態度は、いずれの場合も儒士による直接的 な介入と管理を主張するものから、次第に従事者に儒学 的修養を求めるものへと転換していったのであろうか。 こうした転換は彼ら自身の位置づけの変化や儒学の勢力 が強まったことによるものか、それとも別の要因がある のか。このほか、これまでの分析はすべて宋代文人の武 学や医学に対する重視, そしてこの二つの領域の「儒化」

とその主要な面における評価に焦点が当てられていた が、介入された知識の領域とその媒体については未だ検 討が行われていない。いったい彼らはいかに儒士の積極 的な「関心」と「介入」をとらえ、いかに対処していっ たのであろうか。重要なのは、詳細に宋人の文集や筆記 を見ていくと、当時の文人が関心を寄せた対象は、決し て武学や医学といった国家や社会全体の利益と密接に関 係する領域だけには限らないということである。前述し たとおり, 本稿で検討する風水術数を含む, 多くの本来 末芸小道とみなされていた領域すべてが、多くの士人た ちの注目をあつめ、彼らが関心を寄せ、討論し、さらに は参与する対象になっていた。こうしたもともと儒士に とって取るに足らないような技芸が、いったいいかにし て宋代文人の興味の対象となったのであろうか、また接 触する中でどのような影響をおよぼしたのであろうか。 これらの問題の解答をえるためには、おそらく武学と医 学の二例だけでは無理であろうし、また国家や文人の角 度からのみで考えることはできない。これらの技芸自体 の宋代における発展、そしてその従事者と儒士の間の相 互活動の状況を検討して、はじめて一つの明確なイメー ジを描きうるのである。本稿では風水術数と術士の社会 的地位を検討の主軸として、儒・術の間の複雑な相互交 流の状況、そして宋代における社会流動の可能性やルー ト, そして当時の人々への影響を探り, 一つの例証とし ての説明することを目的とする。

士人の顧客への接近

今日的な視点からみれば、宋代の風水術師と士人の密 接な接触は、かれら個人の社会的・文化的地位の上昇を 助ける結果となったといえるが、その本来の動機は自身 の地位を改善することではなかった。かれらが密接に官 僚や儒士の動向を追い、魅力的で重要な顧客とみなして いたのは、おそらくは主に金銭や利益を計算したうえで のことであった。まず、こうした政治的・社会的・文化 的エリートは、通常一般民衆に比べてより豊富な資財を 有していたために、かれらに奉仕する技芸の士に対して. 気前よく報酬を与えていた。次に、官僚や儒士の間には しばしば密接な人的ネットワークが存在していたため に、いかなる術士でもいったんその認知を得ることがで きれば、かれらが口頭あるいは文字で人づてに推薦して いくことによって、その名声を遠くまで伝え、より広い 市場を開拓することができた。当然ながら、術士を積極 的に士人へと接近させた最も重要な要素の一つとして, 多くの宋代士人が次第に彼らの技芸に対して、強い興味 と受容の立場を示しはじめたことがある。宋代の社会階 層間の流動性と開放性によって、個人と家族の地位改善 はもはや遙かにおよばない夢ではなくなった。そのために個人や家族のチャンスを予測し操ることを目的とした術数は、時代の需要に合った「実用性」によって、広く歓迎されたのである。このような需要と供給の相互作用のもとで、多くの術士が適時に士人の求める技芸を提供し、名声と実益を獲得して、さらにより多くの異なる社会背景の人々を術数の市場に引き込んでいった。同時に、頻繁な社会流動は、地位向上の前途をもたらし、上昇の際の激しい競争をより深化させただけでなく、当時の人々に下降移動の不安をもたらした。それゆえにかれらはより積極的に、上述の術数を含む様々な手段をもって、自己の地位を上昇させたり、より強固にしたりしたのである。

風水術が宋代士人の間で提供できた奉仕は、一見、そ の他の卜卦・相命・測字といった類の術数と比較する と, ほとんど競争性を持たないものである。その原因は, 風水術の運用が、明らかに時間と空間の上で多くの制限 を受けたことにある。各種の卜算術士は機動的に士人の 動向を追い、士人が頻繁に現れる首都や貢院、あるいは 学校といった場所に随時集まり、生年月日・容貌骨格・ 測字などの融通の利く方法によって未来の功名禍福を即 座に予測し提供することができたが、一方で風水術士は 往々にして特別な舞台と道具を必要とし、そうしてはじ めてその技芸の演出をすることができるのである¹⁹⁾。ま ず、風水術士がその技芸を運用し発揮できる最も主要な 機会は、顧客の家中で親族が死亡し、喪葬の事務を処理 しなくてはならないときである。このとき、風水術士は 専門的な地理の知識を通じて地勢を掌握し、歳月日時の 干支を考えることで、常人には見いだしがたい吉地美穴 を発見して, 顧客が親族を葬る場所を提供するのである。 その行動の背後にある理論的基礎は、殯葬は人に禍福を もたらすもので、祖先を吉時に美地へと葬ることができ れば,子孫は加護と富貴を得られるということにあった。 しかし、こうした喪葬という機会は、人間の家であれば 免れがたいことではあるが、それほど頻繁にあることで はない。そのため風水術士が技芸を発揮する機会は相対 的に少なく、制限も多かった。このほか、風水術士の主 な技能は葬地を選ぶことであり、葬地の選択はまた往々 にして主に死亡した者の郷里付近であるから、その他の 術士と同様に移動性の高い士人たちの間で適時に需要に 応えることは、ほぼ困難であった。

とはいえ、風水の術が社会上に実際に発揮される中で、その他のト算術数が提供することができない職能や、いくつかの臨機応変の方法によって、上述の時間的・空間的制限を補うことができ、士人に用いられ、注目され続け、その生活世界の中で活躍していたのである。風水術数の優勢とその代替がきかない性質は、主にそれが「個人」の貴賤禍福を占えるだけでなく、「家族全体」の未

来の発展の趨勢を予見できることにあった。このため、 墓を占って正確に家族の発展を予測できる術士がいれ ば、しばしば士人が争って招聘する対象となった。紹興 年間の術士羅正甫が葉顒(1100-1167)の祖宅(興化仙 遊県) に立ち寄ったとき、洪水の危害を受けた百年後に 宰相を輩出すると予言した。この十五年後がまさに洪水 から百年後にあたり、果たして術士の予言どおりに葉顒 は左僕射を拝した(当時は左右僕射の職が宰相であっ た)。術士の予言は一旦あたれば、「士大夫聞者、争延致 之」²⁰⁾ということとなった。また、よく墓を占える術者 が先に先人の墓を観察することができなかったときに は、しばしば自身の家族の発展に興味をもつ士人を深く 失望させたのである²¹⁾。このほか, 風水の術は事後の「予 測」ができるだけでなく、また事前に個人や家族の盛衰 や禍福を「操作」することができた。そのため、努力し て風水の吉地を探し出し、親族や自分自身を葬ることで、 後世の子孫の栄達を図ることは、宋代において少なくな かった。蔡京(1047-1126)が吉地を選んで父を葬った ことなどは、宋人が最も好んで語る例の一つである。彼 はかつて術者に依頼して葬地を探させていたが、後に夢 の中で神示を受けて、ついに「野駝飲水」の地形をした 臨平山(浙江)を探し出し、父を葬ったのである。宋人 がこの話を好んで語る理由は、おそらく彼が新党改革の 推進者として、一度は富貴を極め、親を風水によって葬 ることでそれを永続させようとしたが、最後は衰退して 一族をほぼ滅亡させ、ついには反対者の嘲笑の的となっ ていたためで、また同時に風水術者をつとめてしりぞけ るべき証拠となったためであろう220。南宋の士人周必大 (1126-1204) が宰相在任中に、死後の葬地を求め、神 人示夢の方式をかりて同僚に地をもとめたことは、吉地 をもって自家の子孫の栄達をもとめたためであるとされ ている23)。さらに、喪葬中の卜地・択日の儀式は、それ ほど古くからあるものではないが、宋代では広まってす でに久しかった。またそれは必ずしも親族の葬儀をかり て幸福を求めたわけではなかったが、少なくともその肉 体と霊魂に安住の地を与えるものであった。そのため, 風水術は、また当時の人々が親族の葬儀を処理するとき、 ほぼ参考にせざるをえない知識であった。

風水術において最もよくみえる柔軟で応用の利く方法には、上述の墓を占う意味の「相墓」もその中に含まれる。風水術が祖先の墓地と子孫の貴賤・貧富・寿命・賢愚と連動関係の上にある以上、術士は特定の墓葬の課程で吉日吉地を選ぶ技能を発揮する以外に、当然のこととしてその他のいかなる時間においても既存の葬地風水の形勢を観察し、それが子孫に及ぼす禍福の影響の可能性を見極めることができなければならない。言い換えれば、風水術士は喪葬以外の機会にも、その「相墓」の技能によって、士人の個人や家族の未来の発展に対する興味を

満足させ、さらには必要な警告や危機回避の提案を提供 することができたのである240。史料によれば、北宋の張 大亨(1085年の進士)の一家の科挙による功名は、すべ て一人の相墓者の預言にあらわれていた。この相墓者は 張家の先祖の墓を観察した後、はっきりと張家に「遇丑 年有赴挙者、必登高第」と指摘したが、果たしてこの相 墓者の言うとおり、張家の父子兄弟が後に科挙に赴くと、 すべて丑年に成功を収めたのである²⁵⁾。この記載の中で は、この相墓が張家の要請によって行われたものかどう かについては言明していないため、この術者が金銭的な 報酬を獲得したかどうかは確認できない。しかし、この 主人公が術士の預言が真実であったことを確認した後. このことを周囲の友人たちに語ったことが推測でき、主 人公の友人であった何遠(1077-1145)がそれを聞いた 後に記録して、「人事地理相符合之異也」としたのであ る26)。そしてこの事件が主人公の口伝,及び後の文字化 を経たことによって,この術者とその施した相墓の術は, 文人グループの間で広く認知され、名声が広まったこと は明らかである。言い換えれば、たとえはじめは金銭の 報酬を得なかったとしても、事件中の術者はその名声を 広めるという、間接的な利益を獲得したのである。

時間的制限を突破できた以外に, 風水術の実施には, 空間的制限を乗り越える便宜的な方法もあった。すなわ ち墓宅の風水を、絵図を通して掌握する方式によれば、 現場で調査・分析することに拘泥する必要がなかったの である。そうすれば、術者は個別に墓葬の所在地につい ての山水地形図から、合葬の時の年月といった情報を加 えて、葬地の風水と子孫の禍福に対する影響を分析し、 非常に高い正確性を得ることができた。たとえば三衢(浙 江) 地区の有名な張姓の相墓術者(自らは鬼霊を称して いた)は、常に民間の家の墓地に招かれ、墓地風水を調 査したのみならず、某銭塘県令の依頼に応じて、その祖 先の墓地の平面図から、その禍福の影響を分析した。こ のことは当県の県尉の口を通じて何遠の耳に届き、これ によって何遠はその聞いたところを記載したのである。 この記載の中では、明らかにこの相墓者はみずから現場 に臨むことはしていないが、「方位山勢不差」とされる 絵図をしばらく熟視した後、彼の下した分析は完全に現 実に符合したのである。この県令自身も地理術について 知識があったことから、相墓者の正確な分析に対して特 に驚き, 敬服して, 思わずその手を握り, その優れた術を 褒め称え、伝説中の相宅墓術の始祖と比して「吾不知青 島子・郭景純何如人也,今子殆其倫比耳」と称した²⁷⁾。 さらに、術者はまた常に絵図の方式によって、その葬地 禍福の信頼性をあらわした。彼らは富貴・卿相の家の墳 葬の地形を区別して絵図の方式で記録・収集し、この例 証によって葬地風水の家族の発展に対する重要性を強化 することで、読者の心を動かし、顧客を引きつけたので

ある。宋末元初の文人劉詵 (1268 – 1350) はこの現象を みずから観察し、その説得力について「旧見葬書、凡前 代富貴家所葬、輒図以示人、曰是出某相・某卿、観者歆 動」と述べている²⁸⁾。

このほか、また注目すべきは、風水術を施行する際の 空間的制限が、特に士人顧客に対する奉仕について言え ば、宋代の政治と社会の情況の変化にしたがって、次第 に小さくなっていったことである。これまでの研究によっ て、すでに北宋と南宋の間で、士人たちの生き残りと仕 進の策略の重心が、首都から地方へと転じる趨勢にあっ たことが指摘されている。北宋期においては、挙人や進 士の合格者枠が比較的多く、豊かな教育資源を有し、試 験の情報や人的ネットワークが行きわたっていた首都開 封が、科挙試験において最も重要な役割をもっていたた めに、当時は仕官を目指す者が全国各地から競って集ま り、その近道を手に入れていた29)。そして、高級官僚の 家は、仕官する族人を育成し、他の大家族との婚姻を通 してネットワークを形成するなどして、家族の地位の優 勢を維持するために、その大半が京城に聚居していた³⁰⁾。 こうした首都に集まった官僚文人は、風水術士にとって 近づきやすかったが、彼らは往々にして遠地から来てい るために、もしその家中に喪葬の事務があれば、帰葬観 念の影響の下、大半がやはり郷里に帰って処理しなけれ ばならなかった。そのため、彼らを追って首都に来た風 水術士は、葬地を選ぶなどといった重要な事柄について は、必ずしも直接にその専門的技能を発揮することがで きなかった。いうまでもなく、時間と労力を費やして葬 地を選ぶことによって、その士人顧客と密接な相互関係 をつくり、さらには長く個人的なよしみを通じることも できなかった。しかし、南北の重心の移動にしたがい、 また南宋が臨安に建都したことによって. 風水術士と士 人の間の相互関係は明らかに密接になり、深化していっ た。その原因は、もともと京城が独占していた教育・文 化・社会のネットワークなどといった資源が、次第に長 江中下流域の発展した地域に取って代わられたことにあ る。さらに、科挙試験の競争がいよいよ激化するにつれ、 士人の家族もまた仕進のほかに, 地方に基礎と人脈を築 くことも家族の地位を維持する重要な手段であると考え るようになった。これによって、南宋期には、士人官僚 が住居を選ぶ際に, 京城を優先しなくなったのみならず, 仕官する以外の大部分の時間は、地方に長期居住してそ こでの関わりを深め、アイデンティティを形成していっ た31)。このような歴史的発展の情況下で、風水術士は移 動を繰り返す士人を追って長い旅をする必要がなくな り、地方にいる多くの士人たちの関心をあつめて、現地 でその地脈を発掘し、よい墓地を探す技能を発揮するこ とができたのである。

確かに、現存する文人の文集中には、南宋期の士人と

風水術士の密接な相互関係を示す記述が多く見られる。 たとえば咸淳元年(1265)に進士となった淳安(浙江) の人何夢桂は、彼の文集中に五人の異なる地理師に贈っ た六首の詩文と、さらに別の二人の地理家のために撰述 した二篇の序文を収録している。そのうちの一篇で李景 雷という地理師に贈った序文中で、何夢桂はこの地理師 の技術の伝承について説明し、自分と彼との関係を描い ている。それによれば、李景雷は地理師の家の生まれで、 その伯父の地理術は、「其伯父良玉, 夾錦嚢遊諸貴公之門, 争羅致擢用32)」とあるように、広く地方士族に歓迎され たとしている。そして何夢桂は李景雷の人となりや地理 術を褒め称えるだけでなく、「余於三十年前早識之、従 余遊至今如一日。其為学刻苦自励,於古地理與僻書有未 解, 忘寝食求之, 弗得弗措, 繇是所業益精。其与人交, 不苟得不為欺偽, 其不合寧不唯以去33)」とあるように, その本人との長きにわたる情誼についても述べている。 何夢桂と李景雷の交誼は、この序の撰述目的からも明ら かに見てとれる。つまり「子持此以往焉、往而不遇哉? 於其行也, 贈之以言34)」と述べているように, 何夢桂は, 李景雷の人格や技術を保証することで、後に彼が諸方で 行動する際に、他の士人顧客からの愛顧と認定を獲得で きるよう取り計らったのである。

実際には、文集中に収録されている士人が風水術士に 贈った詩文は、決して個別の文人と風水術士の間の相互 関係の様子を完全にあらわしているわけではない。なぜ なら、詩文という方式ではあらわされなかった相互関係 もあっただろうし、あるいは作者によって残されなかっ た詩文もあるだろうからである。たとえば、南宋の士人 謝枋得(1226-1289)の文集中では、たった一篇、楊南 川という地理師に贈った序文をみることができる。序文 中において謝枋得のこの地理師に対する叙述は、上述の 何夢桂が撰述した内容に類似しており、この地理師が専 門とする術数や, 人格的特質, そして風水術をもって富 貴の家に遊ぶといった行動について述べている。しかし 残念なことに、文中では謝枋得と楊南川の間の私的な交 流について言及しておらず、ただ前代の術家が生前に不 遇であったが、死後になって青史に名を残した例(南唐 の范太史など)をもって、彼が一時の不遇を憂えること のないよう励ましているだけである。つまり、その中に 明らかにみえる推薦の性質以外には、この序文の内容か ら、二人の相互関係の様子を判断することはできず、ま た謝枋得の風水術士に対する基本的な態度を理解するこ ともできない。しかしながら、その他のルートの情報か ら,「楊南川精堪輿術,為謝文節公枋得所最心折35)」と あるように実際には謝枋得がこの地理師を相当に称賛し ていることが見てとれるのである。さらに楊南川以外に も、謝枋得は他の風水術士と親密な交流を持っていたよ うである。たとえば、南宋末期の文人熊禾(12531312) は、呉竹澗という地理師に贈った一篇の序文の中で、「与畳山(謝枋得の号)謝公交最久、公家再世皆其卜兆。公嘗称其初交、但見其樸拙・其淳実、久則信其為積徳尚美君子長者人也³⁶⁾」と言っているように、この地理師が長らく謝枋得の家に術数を提供していただけでなく、謝枋得本人もまた彼と長きにわたる密接な親交があったと述べている。

士人と風水術士の相互関係に関しては、風水の術が最 も盛んに行われた江西地区においてより明らかで、豊富 な記述がある。たとえば、愛国の詩人として有名な南宋 の吉水の士人文天祥 (1236-1283) は,広く知られる「正 気歌」や「過零丁洋」などの気勢盛大な著作の他にも. 実はその文集中に、在地の卜算・風水など各種の術士の ために作った詩文を多く残している370。こうした詩文や 著作は、現代の研究者に文天祥の早期の成熟する前の作 品として、また人情や情景の描写としてみなされ、その 重要性が見落とされている380。確かに、宋代士人が卜算 術士に贈った作品のうち、ある部分はいわゆる人情の請 に応じてあらわしたものである390。しかし、関係する作 品の多くが、文人の風水に対する関心や、さらには術士 との間に存在した交遊ネットワークなどといった重要な 情報を明らかに伝えているのである。文天祥のこうした 詩文の中には, 少なくとも七篇の風水地理術士に贈った 作品がある。作品中では、ただそれら術士の地方におけ る活躍の様子や、彼個人と術士の間の相互関係の情況を 描写するだけでなく, 同時にまた彼の風水術に対する態 度も露わにしている。文天祥は山人の黎端吉に与えた序 文の中で、「黎氏祖為吾郷羅氏葬地、百年效験」とある ように、黎家が代々この業に従事して、霊験もあらたか であるとし、さらにその家を継いだ黎端吉は、山川の情 況を把握することについて特に明敏で比類ないと述べて いる。もちろんこうした紹介は決して単なる社交辞令で はない。なぜならば、文天祥は文章の中で、かつて黎氏 と二人で山川の地理の情況について切磋琢磨して討論し たことを述べ、婉曲に知り合うのが遅すぎたと漏らして いるからである。また黎氏も往来の過程で、かつてある 吉地を推薦したことがあった。ただ、この術士は非常に 活発な人物であった。というのも, 文天祥がその地を先 に調査するため準備をしている時に、黎氏は他の招聘が あり、出立しなければならなかったのである。別れに臨 んで、文天祥はこの序文を贈り、また期待し尋ねるよう な口調で「臨別叙其説, 其帰来也, 為予復来乎?⁴⁰⁾」と また黎氏と再会できることを望んで結んでいる。

また同様に、文天祥は山人黄煥甫に書き贈った別の一篇の序文の中で、「乃祖、贛風水名術也、予里大家祖地多出其手⁴¹⁾」とあるように、この術士の出自が当地の著名な風水の家であったことを述べている。しかし、彼とこの術士は、前述の黎氏よりもよりつきあいも長く、よ

り深く敬服していた。彼自らが述べるように、この序文 を書く十数年前にも、かつてこの術者に詩を贈ったこと があり、またその数年後にはこの術者の変化を感じて、 詩文中の言葉を改めているのである (ただし, 前述した 状況のように、この詩文は作者の文集中には収録されて いない)。その後長らく黄氏とともに風水地理の術を討 論したり、山野を歩いて実地に地勢の調査をしたりして いたために, 文天祥は黄氏の為人と, その卓越した術数 をよく理解していた。このことから、彼は黄氏に対する 信任と敬服をより深いものとし、それまで自身が軽々し くそのほかの術者を信用していたことを嘆いて「山人之 献地者,日至吾門,予使煥甫往観,常不満一笑。煥甫曠 数年始献一地, 所献真如其説。予為山人所欺者多矣, 若 煥甫真不我欺者⁴²⁾」と述べている。この序文の最終的な 目的は、「庶幾有因予而信煥甫、 煥甫必能出所学、 以報 所知」とあるように、多くの文人が術士のために著した 詩文と同じく、その主人公である黄氏を推薦することに あった。とはいえ、文天祥はその文中で、今後も黄氏と より長くつきあい切磋琢磨することができなくなること について、いかんともしがたい無念さを吐露している。 実のところ文天祥は、「惜也、 煥甫汲汲餬口、 以奔走於 四方…予嘗謂能為煥甫百指計, 使煥甫安居一年, 必能時 発天地之蔵, 以使予欣然而不厭。予方煮石山中, 計必不 能及此…⁴³⁾」と述べているように、できるならば黄氏を 援助してその一家の生計を落ち着け、一時的にでも食い 扶持をもとめて奔走することがないようにしてやりたか った。そうすることで、彼は黄氏と山水地理の秘密を研 究し、発掘できるのだから。

さて, これまで様々な事例を通じて, 宋代における風 水術数の発展する潜在的な要因とその特徴、そしてそれ が多くの士人による運用と支持を集めたことを述べてき た。しかし、これだけで風水術数が士人の間でどの程度 普及していたかを評価するのは、実のところまだ困難で ある。その原因は、風水術が普及すると同時に、また儒 者による猛烈な批判を受け始めたことにある。特に葬地 禍福の説によって当時の人々が親葬を利用し幸福や子孫 の富貴を図るようになり、親族の遺体や魂を放置してす みやかに安置しなくなったことなどについては、不孝の 極みと見なされていた。ゆえに多くの士人は、たとえ風 水術を信じ、それに頼っていたとしても明確で直接的な 記録を残すことは少なく,ましてや自分が親葬の過程で, どのように風水術を利用して個人や家族の未来の禍福を 操作しようとしたかの動機などは決して明らかにはでき なかった。現存する関係史料の多くは、第三者が見聞き したことを転載したものとなっている。また、比較的記 載されやすい風水を信奉する事例は、その中の主人公の 無私の心が際だっているもので、特に多いのは風水の利 益を世の中に普及させて自己の利益を図らないといった

事例である。この類の事例の中では、風水の吉地を教育の場所にしたというものが最もよく見うけられる。たとえば北宋の士人范仲淹(989-1052)は、かつてある土地を得て、そこを蘇州府学建設の地として提供した。というのも、堪輿家がかつてこの地を「世出卿相」と予測したために、范仲淹は「誠有之、不敢以私一家」という考えのもと、興学の用にと差し出したのである⁴⁴⁾。湖州の烏程県学も、「与其善之於一家、不若推之於一郡」といった同様の考えのもとで、士人于拂の父によって提供された。果たして、そのわずか数年の間に、于拂は礼部省試でトップになり、そのほか賈安宅(1109年の進士)や莫儔(1089-1164、1113年の進士)の二名が続けて科挙で状元を獲得したのである⁴⁵⁾。

風水術数が宋代に流行し、士人の間に普及した程度を 示す直接的な証拠は不足しているものの. 現存する様々 な間接的証拠によって, 我々は宋代士人の生活中の広範 な影響について、概括的なイメージを描き出すことがで きる。比較の観点からいくと、宋代における風水術の流 行は、他の時代に比べて盛んであった。たとえば、明人 の黄省曾(1490-1540)は、堪輿風水の術に対する批判 の中で、次のような評価を述べている。「然葬埋之術莫 尚於唐宋,亦莫盛於唐宋460」。このような大まかな比較は, 宋代に風水地理等の関連書籍が大量に出現したことによ って、さらに裏付けることができる。統計によれば南宋 の鄭樵が編纂した『通志・芸文略』の五行類の中に、書 三十種、千余部、三千余巻が収録されている。そのうち 葬書は百余部, 五百巻近くもあり, 前代を大きく上回っ ている47)。そのほか、『四庫全書総目』の記載によれば、 晋朝の郭璞の作と伝えられる葬術の古典『葬書』もまた 宋代になって出現したものであり、宋人に尊重され、増 補と編集を経て広く普及したとされている。なぜならば. 郭璞の本伝にはただ河東の郭公から『青嚢中書九巻』を 授けられたと記すのみで、この『葬書』を著したことは 述べられていない。また後の唐志の中でも、『葬書地脈 経一巻』や『葬書五陰一巻』といった類似の葬書は存在 するものの、それらが郭璞の著作であるとは述べられて いないのである。それゆえに、いわゆる郭璞の『葬書』は、 「自宋始出, 其後方伎之家, 競相粉飾, 遂有二十篇之多48)」 と述べられている。また、程頤(1033-1107)の説によ れば、「葬術一書、遂至百二十家49」とあり、こうした 葬書の類は北宋期から早くもすでに百種類以上にも達し ていたとされる。また宋末元初に生きた文人呉澄(1249 -1333) は、これら宋代に流行した大量の地理書の社会 上における実際の流通状況について,「少時嘗観書市所 売地理書, 書盈一車, 靡有不備, 兵火後其書不全矣50)」 と自らの体験をもとに真に迫る描写を残し、宋代の風水 葬術の普及をあらわしている。

しかしながら、興味深いことに、宋代士人の風水術数

に対する熱意や傾倒といった現象を最もよく伝えている のは, 多くの風水術に対する批判と, その猛烈な論述で ある。後代の士人の観察によれば、宋代士人のうちで風 水を信じず、理によって批判するものは多かったとされ る。たとえば元人の陳櫟 (1252-1334) は特に次の三人 を挙げている。「若稽古先賢之不信風水者夥矣。章章者. 前有司馬文正公(司馬光),次有澹菴胡公(胡銓),継有 誠斎楊公 (楊萬里)51)」。また,清人の徐乾学 (1631 -1694) は, 司馬光 (1019-1086) の他にさらに二程兄弟・ 陳傅良(1137-1203)ら多くの風水術に反対の立場をと った宋代士人を挙げており、その各自の喪葬に対する基 本的観点について逐一収集し、彼の葬地に対する討論の 後に列挙している⁵²⁾。こうした「代表的」な批判の中に おいて、風水陰陽の説を盲信する者の中には、多くの「無 知」な平民百姓のみならず、また数多くの学士大夫も含 まれていることが見てとれる。司馬光はその著作『葬論』 の中で「挙世惑而信之,於是喪親者往往久而不葬53)」と 述べ. 葬書中の葬地禍福の論は各階層に普及しており. 親族の遅葬や、さらには不葬といった悪習を引き起こし たとしている。ここでいう「挙世」の中には士大夫もま た含まれている。というのも、彼は特に多くの人が「遊 宦遠方未得帰」を親族の遅葬や不葬の口実にしていたと 指摘しているからである。さらに、本来親族が葬られて いなければ喪は除かれないのだが、彼はこうした官僚士 大夫達が葬らずして喪を除いていることに気づき,「従 宦四方, 食稲衣錦, 飲酒作楽, 其心安乎⁵⁴⁾」と述べてい る。陳傅良はある墓誌銘を書く中で、葬地陰陽の荒唐無 稽さとそれが普及している現象について、特に「知名之 士不能免也」とし、同じく批判的口調で「然挙世惑之何 也?彼委巷之民, 怵於其言者, 妄以其親徼利然也。学士 大夫豊忍以其親為利. 而惑焉者又何也?55) と述べてい る。また楊萬里 (1127-1206) は当時の人々が風水の利 を求めてしばしば祖先の葬地を移していたことを批判す る際、こうした行為を「不惟民也、惟士亦然56)」と見な している。

このほか、司馬光・韓琦(1008-1075)・二程兄弟・胡銓(1102-1180)らは、風水信仰がそれぞれの家族の喪葬儀式の中に入り込んでいたことを言い、努力してやっとそれを防止し斥けることができたとする事実は、また葬地風水の宋代士人に与えた影響の深さと広さを説明している。司馬光は次のように述べる。家中で親族の葬儀を取り仕切っているとき、族人が喪葬は一家の大事であるから、陰陽葬師に意見を求めるべきだとして、葬師の人選をしてしまった。族人の圧力のもとで、司馬光の兄は断固として拒絶することができず、ただ表向きは従っておきながら裏で画策する方法をとるほかなかった。彼はこっそりと金を積んでその葬師に賄賂を贈り、自分の指示に従って地を占い、日を択び、葬書でもって選ん

だ時と地が大吉であるとごまかしてほしいと頼んだ。こうしてやっと、「以示族人、皆悦無違異者⁵⁷⁾」とあるように、族人の異議を免れ、彼らを満足させることができたという。同様に、二程兄弟も家族の中では異類であり、「祖父葬時亦用地理人、尊長皆信、唯先兄与某不然」といって喪葬時の葬師の役割について異論を唱えている。彼らは後に昭穆の法のみによって墓穴を一穴としたが、この墓穴は尊長に招かれた地理人によって絶処大凶であり、墓穴とすべき場所ではないとされた。しかし、司馬光の兄が上述のような画策でそれを回避したのと違い、程頤は自分の決定を堅持し、「故知是絶処、且試看如何」といって、いかなる改変や修正もしなかった。実際には程家の人丁はその後も続々と旺盛であり、親族を「絶処」に葬った影響は受けなかったため、彼は時下の葬書や葬法を「最無義理⁵⁸⁾」と強く批判したのである。

そのほか、韓琦と胡銓の例では、患を未然に防ぐ方法 をとっている。彼らは生前から族中の師弟に自分の葬礼 の形式についてよく言いつけており、風水の術にこだわ って葬師の言に惑わされることのないように、さもなけ れば悪い結果を招くだろうと、厳しく彼らを訓戒してい た。韓琦は「戒子姪書」の中で「死則託二瑩、愼勿葬他 所。得従祖考遊, 魂魄自寧処。無惑葬師言, 背親図福祐。 有一廃吾言, 汝行則臣虜。宗族正其罪, 声伐可鳴鼓。宗 族不縄之、鬼得而誅汝59)」と言うように、はっきりと自 分の死後葬られる場所を示し、またその意志に背いた結 果については非常に誇張して、霊界の鬼霊の報復まで持 ち出しているのである。同様に、胡銓は自分の死後のこ とを甥の羅尚志と子の胡泳に託すとき、「只于水北一代 家山、取其土厚水深足矣」と、葬地の選択に多くの精力 を費やしてはならないと強調しており、また「俗儒不読 書, 不見古人之議論。溺于陰陽家説, 背孔孟之学。戒之, 慎之。若不従吾言, 勿践吾門, 勿受吾教600」といって, もし言いつけに背けば、自分の家人や子弟として認めな いと強く警告している。こうした厳しい訓戒警示の言葉 から韓琦や胡銓が葬地風水の術に対してはっきりと反対 の態度をとっていたことがわかり、そのために元人の陳 櫟は胡銓に対してかくも敬服していたのである。しかし ながら、その中でも最も重要な情報は、「澹菴(胡銓) 之于羅生, 戒其泥風水, 尚恐其信風水, 不免危言痛鍼砭 之61)」とあるように、風水術が当時の社会において比類 ない吸引力をもっており、広く士人の家にも普及してい たために、こうした厳しい訓戒と報復も、それを防ぐの に必要な手段となっていたとする陳櫟の分析であろう。

盲信と批判の外で

上述のように、宋代の風水術士は、利益追求を出発点

として、密接に士人たちに接近してその術を売りつけ、 その術数を士人の家に浸透させることに成功して、当時 の各社会階層の生活世界に普及していった。しかし、当 時の文人儒士たちが風水術数の理論を受け入れ、さらに 平時あるいは親葬の過程で術士と相互に密接に活動して いたその理由は、本当に多くの儒家の批判者が述べたよ うな、親葬を利用して利益を図るという不孝や盲信によ るものだったのだろうか。士人の風水術数に対する関心 や定義、評価を詳細に観察してみると、彼らと風水術士 の間の往来や相互活動、そして風水領域への実際の介入 行動は、利益を図るという動機の他にもまた様々な思惑 があり、それが儒家知識人たちに風水術数に対する支持 や信頼、熱意を促したのである。さらに、こうした態度 や行動をとった者は、実際に喪葬において風水術数を信 頼した士人だけにとどまらず、実は後代の士人から代表 的な宋代の批判者と見なされる多くの人物もその中に含 まれている。というのも、こうした儒士達は犀利な言説 によって批判していたものの. 葬地理論を根絶すること を最終目標にしていた者は少なかったからである⁶²⁾。む しろそれとは逆に、彼らはしばしば論述の過程で、今あ る地理の術に対して規範を設ける意図をあらわしてい る。彼らは各自の立場から、風水術数およびその術士に 対し異なる区分的方法をとり, 受容可能な範囲を示して, 行うべき修正と改善について建議している。こうした行 動は裏を返せば風水術数やその術者の新たな分類やモデ ル、位置づけに対して重要な影響を及ぼした。

まずは程頤の立場から述べていこう。前述のように, 族中の尊長の提案をつとめて排除し、昭穆の法をもちい て親葬を行って、俗師の葬地禍福の理論を斥けたことか ら、二程兄弟は後代の多くの士人から、世俗の葬師信仰 に反対する代表格と見なされていた。しかしながら、実 のところ程頤は葬地を選ぶことについては反対していな かった。彼はただ子孫が祖先を奉ずることを思わず、も っぱら自己の禍福や利益を考えて葬師のいいなりになっ ていることに反対していただけである。彼が択地につい て持っていた基本原則は「卜其宅兆, 卜其地之美悪也, 非陰陽家所謂禍福者也」であり、いわゆる「美地」ある いは「吉地」の認定基準は次の二つである。一つは「土 色光潤,草木茂盛」。二つめは「五患」を避けること, つまり「須使異日不為道路, 不為城郭, 不為溝池, 不為 貴勢所奪,不為耕犂所及」である63)。興味深いことに, こうした択地の原則が最終的に到達するべき目的は、彼 らの努めて斥けた葬地風水の説と完全に背離するもので はなく、それどころか少なからず同工異曲の部分があっ た。というのも、「地之美者、則其神霊安、其子孫盛… 父子祖孫同気,彼安則此安,彼危則此危,亦其理也64)」 とあるように、彼は祖先の霊魂を美地に葬る際、祖先の 霊の安置だけではなく、同時に子孫の繁栄についても強

調している。つまり程頤と葬師の説が呈する互いに排斥 しあるいは相応する観点は、実のところともに同じ理論 的基礎の上に立っているのである。そもそも喪葬の発展 の歴史的脈絡においては、早い時期から『周礼』と『孝 経』という二つの相矛盾する見解が存在していた。『周礼』 では明確に国民が族葬を採用することを規定し、 さらに 個人はその位階に応じて時期を決めて葬られるべきこと を強調した。墓地と日時はみな決まっており、選択の余 地やその必要性は非常に少なかった。それに対し、『孝経』 は「卜其宅兆而安厝之65)」とあるように、択地の重要性 を強調した。つまり、親葬の過程で卜筮の法をとる以上、 吉凶の区別や取捨選択という行動があり、そこには選択 の余地があったのである。程頤は『孝経』の立場をとっ て択地の必要性やその裏にある孝親という動機を強調し ており、風水術もまた明らかに『孝経』の択地の理論の 上に立って, 葬地と子孫の禍福や賢愚との関係を強調し たのである。このように、程頤の択地孝親の説もまたし ばしば風水術数の支持者によって引用され、その自己弁 護と合理化の道具として利用されたのである。

当然ながら、多くの士人支持者たちにとって、風水術 数を否定しない理由は、その理論の有用性と合宜性にあ った。「故泥其術則害教、廃其術則其論亦誠有可取用之、 亦有能合天地之機者660」とあるように、人々が過度に耽 溺することがなければ、利益を図って喪葬を滞らせるよ うな負の社会的影響も現れ得ないのである。しかし、い ったいいかにすれば親族の霊を安んじつつ風水におぼれ ずにいられるのであろうか。朱熹(1130-1200)の解釈 では、葬地は択ばざるを得ないとしながらも、「但不当 極意過求, 必為富貴利達之計耳。此等事自有酌中恰好処, 便是正理(57)」と述べる。しかし、詳細に彼の択地につい ての論点を観察すると、程頤の風順地厚の条件以外にも、 さらに「亦需稍有形勢、拱揖環抱、無空闕処、乃可用也。 但不用某山某水耳68)」が加わっていることがわかる。こ のことから、彼は程頤の言う風水術士の言は聞かずとい う立場に追随しているものの、風水術数における山川の 形勢についての理論に対しては合理化を行い、さらにそ れを実際の行動の中に取り入れていたことがわかる。「文 公先生与蔡季通予卜蔵穴, 門人裏糗行紼, 六日始至」と あるように、朱熹はかつて蔡元定(1135-1198, 門人で あり友人)とともに蔵穴を占ったあと、弟子一行を引き 連れ、食料と工具を携帯してその地へ行き、六日もかけ てやっと到着したという。この彼の行動は、他の士人か ら様々に解釈された。たとえば、明人の丘濬(1418-1495) はこの行動を「慎択也」と見なし、さらに「後之 択葬地者, 誠本朱子是説, 而参以伊川光潤茂盛之験, 及 五患之防, 庶幾得之矣69)」というように後に葬地を選ぶ 者の学ぶべき模範とした。しかし宋人の葉適(1150-1223) は、「乃知好奇者、固通人大儒之当(常)患也70)」 と言って隠然とそれを批判したのである。

南宋の士人真徳秀 (1178-1235) は、北宋の司馬光と 程頤の葬地の説を見た後に、その矛盾点、つまり世人が 葬地の選択に拘泥して終身あるいは累世不葬という状況 を生み出すことに対する司馬光の批判と、葬地を選ぶこ とは「孝子安厝」の心がけであるという程頤の主張に対 して、その折衷的な方法を見いだそうと試みた。彼の方 法と朱熹のそれは似通っていて、「合二先生之言観之、 以安親為心、則地不可以不択。其択也、不可以太拘。択 焉而不至於太拘,則葬不患其不時矣710」というように, 同じく択地の必要性を強調しながら、その際に過度に拘 泥することがなければ、司馬光の言うような埋葬をしな いといった状況を免れることができると指摘していた。 しかし、現実の社会では、こうした折衷的方法は決して 容易なものではなく、真徳秀自身もその問題を十分に認 識していた。司馬光や羅大経(?-1248後)等批判者が 述べるのと同じく、真徳秀も不葬の状況をつくりだす原 因が複雑であり、決して簡単に択葬すべきか否かの解決 はできないことを理解していた。なぜならば、親葬によ って子孫の利益を図るという動機以外に、兄弟間でもそ れぞれ利己的な思惑があり、それが葬地と日時の選択に おいて共通認識を得難くしていたからである。そのほか にも、葬師による詐欺や収賄は、親葬の過程でさらに多 くの問題をもたらした⁷²⁾。このような社会現象を改善す るには、何から手をつければいいだろうか。真徳秀は、 問題の重点は葬書ではなく、葬師にあると考えた。陰陽 の書の中でも、葬地が子孫の禍福を左右するといったよ うな「荒謬」の説に対する反駁があり、故にそれらの書 にも全く道理がないわけではない。反対に、「野師俗巫」 による扇動こそが兄弟の間で択地の時に利を図って相争 う状況をつくりだしているのである。そのため、択地の 時にこうした「野師俗巫」の誤った説を看破すれば、そ れに拘泥して不葬の状況を引き起こすことはないと彼は 考えた。

宋代における喪葬関連の論述中で、葬師の役割は特に大きな関心を集めており、常にあらゆる喪葬の乱れを引き起こすかなめとなる人物と見なされていた。前述の真徳秀が「野師俗巫」と呼んだことなどは、その典型的な例である。しかし、「野師俗巫」といった負のイメージがある以上、またその反対の正のイメージをもつ葬師も存在したはずである。たしかに、司馬光の『葬論』の中では葬師を「良」と「野」に区別していた。族人の断固として陰陽をはかるという圧力の下で、司馬光の兄の直接的な反応は、いかにして「良葬師」を見つけて相談するかというものだった。そして、族人の推薦した「良師」張生は、彼の目には「野人」のために葬送を行う「野夫」と映った。金を積むと喜んで司馬光の兄の言いなりになったことから、この「野夫」張生もまた真徳秀のいう「野

師俗巫」と同様の利益を貪る輩であった⁷³。ならば、益を貪らないという以外に、「良葬師」はどのような条件を備えるべきだったのか。真徳秀は上に挙げた史料中ではそれ以上詳しく説明していないが、彼が地理術士顧涇に贈った序文の中で、彼の考える術士の特質について以下のように述べている。

廬陵顧君涇,邃於陰陽五行之学。以之占天則神,以之相地則不苟。凡今之以術名,未有能過之者也。予乙酉趨朝,遇之於衢梁。君見謂曰,公之此行,不満百日当帰。已而果然。蓋其験如此,非神而能之乎。後四年謁予粵山之下,相与論考卜岡阜之法。終日灑灑不窮,又知其非苟於求售者也。予老矣,方将従君求蔵骨之地。屡其有東淛之役,故書此遺之,且堅其再至之約云。⁷⁴⁾

まず、陰陽五行の術士であるからには、その専門知識についてある程度知悉し掌握していなければならない。次に、占測にあたって、粛々と執り行うだけでなく、霊験の効果もなくてはならない。三つ目に、術者はその技芸をなりわいとしているとはいえ、商売気を出してはならないとしている。真徳秀自身の体験と接触から、この文中の主役である顧涇はこうした条件に適っていた。それゆえに真徳秀は彼をきわめて賞賛し、喜んでこの序を書いただけでなく、「予老矣、方將従君求蔵骨之地」とあるように自身の死後の葬地選びを助けるように依頼しているのである。このほか、彼は前述の文天祥と同じく、この術士が去った後二度と戻ってこないのではないかと心配し、この序文の末にはっきりとした口調で「故書此遺之、且堅其再至之約云」と再会の約束をしているのである。

こうした明らかに対比的な呼称や実際の人格的特質か ら風水術士を区別するという現象が宋代士人の論述中に しばしば出現することから、当時の人々の目には決して 葬師がみな功利的で相談できないような者として映って いたわけではないことがわかる。重要なことは、相談す る前にその知識や技能、そしてその人格について正確な 判断ができなければならないということである。専門の 学を修め、信頼に値する者を見つけ出しさえすれば、依 然として親葬のことを彼らに託すことができるのであ る。よって、いかに正確に葬師を選べるかは、葬礼の成 否に関わる重要な要素となっただけでなく、同時にまた 士人に大きなプレッシャーと悩みの種をもたらした。南 宋の江西の士人欧陽守道(1241年の進士)は、こうした プレッシャーや悩みについて深刻な体験をもち、また彼 個人の提案を示そうと試みた。ト地葬親が子としての大 事であり、葬術の運用はしばしば親を口実に幸福を図る ことであるとされるが、しかし「使体魄得安、子孫綿延」 という観点からいえば、実は子供と死者双方に共通する

願望である。生者と死者両方の心を同時に満足させると いう考えのもと、実は葬術の運用は必要なことなのだと 彼は述べている75)。どのようにすれば慎みつつ重視する ことができるかについては、欧陽守道は親体を安んずる という点で目的を同じくするという理由から「択卜」を 「択医」に比定して説明している。親の病気を看病する際. 子はそれを「庸医」に委ねることができないのと同じよ うに、親が没しト葬する際もまた「庸卜」に委ねること ができない。さもなければ、不慈不孝であるという。そ のほか、「知医」が医者の「良」と「庸」を見分ける助 けになるのと同じく、「知地理」もまた葬師の「良」と「庸」 を見分ける基礎となり、これによって「庸医」や「庸卜」 による過ちを免れることができるのである。この比定か ら、卜葬の際それを執り行う子にとって最も大きなプレ ッシャーは、良葬師を選ぶことによってのみ親を安んじ 孝を尽くすという目的を達成でき、地理の関連知識を身 につけることによってのみ正確な選択ができるというと ころにあったが、問題はこの種の知識が往々にして儒者 の備えるところではなかったということである⁷⁶⁾。

このようなプレッシャーはまたその他の要因、特に親 長の突然の不幸に直面したときにはさらに大きなものと なった。なぜならば、友人が次から次へとやってきて彼 らの知る「良葬師」を推薦するが、自分はこの方面で明 確な判断と選択をするだけの知識を持ち合わせていない とき、ジレンマに悩まされることとなるからである。つ まり,一方に推薦者の善意に対して,いかんともしがた い無形の情義からくるプレッシャーがあり、また一方に 葬儀の期日に関する規範のもとで、時間的に大きなプレ ッシャーがあったのである。いかなる人にとっても、こ の二つのプレッシャーのもとでト葬択地の事を処理しつ つ、葬師が過ちを犯すことのないよう気を遣うのは非常 に困難であった。しかし、卜者の覃生に贈った序文の中 で, 欧陽守道は自分の体験をもとに, 彼自身が同様の状 況下でいかにこの問題を解決したかについて.次のよう に説明している。

覃雲甫之術,後林先生李侯敬愛之。某於雲甫無一日之雅,幸而得之,以安予親者,侯之使来也。侯之学無所不通,雲甫受知於侯,則所挟可知矣。雲甫非借侯以為重,而某又非徒信侯之一言者。聴其議論,観其指画,有契於人心,而又感其為予尽心也。於其行也,序以贈之。嗚呼,予衰経中,敢文乎哉?然亦告夫不幸有親之喪者,知吾雲甫為可信,而重思古人必誠・必信之説而已。淳祐己酉。⁷⁷⁾

ここではト葬者覃雲甫の助力のもと、欧陽守道は親葬 の大事を成し遂げている。しかし、実のところ欧陽守道 本人はこれより以前に覃生と面識がなかった。このとき 親葬に際して彼に助力を求めたのは、その友人であり先 輩である李候(李義山,1220年の進士)の推薦によるも のであった⁷⁸⁾。この史料中では、同時期に他の多くの親 友による推薦があり、それが彼にプレッシャーや悩みを 与えたかどうかについては言及していないが、彼ははっ きりと慎重に考えた上でこのト葬者を選んだことを述べ ている。まず、この卜者覃生は李侯に敬愛されており、 また李侯の学問は通暁せざるところはなかったため、そ の術数は特別なものがあるだろうと推測した。次に、李 侯に高く評価されているにもかかわらず、覃生はまった くそれを笠に着て驕ったところがなかった。三つ目に、 李侯の推薦以外にも、欧陽守道は覃生の議論や計画進行 を詳細に観察し、その術が確かに人心に合っていること を理解したのである。最終的に、欧陽守道は覃生が択葬 の過程で心を尽くして尽力したことを認め、彼が出立す る際に、この序文を贈って感謝の意をあらわし、また他 の不幸に逢い親族を亡くした家に、信頼できる術者とし て覃生を推薦したのである。

ここからわかるように、宋代士人が葬師の「良」と「庸」 を見分ける鍵になるのは、関連知識の理解度と、それを 執り行う態度を観察することであった。たとえば、真徳 秀と欧陽守道の認めた葬師は、いずれも葬地に求められ る関連知識を深く研究し理解していた。またいずれも一 般の葬師に比べて、明らかにまじめに取り組み、利益を 求めることがなかった。こうした知識や品行への重視、 特に書物による知識を強調したことは、宋代士人の典籍 や道徳を重視する一貫した態度のあらわれである。事実 上, 前述の「儒将」や「儒医」が形作られていく中で. 知識や徳行がしばしば実際の技芸よりも強調されたのと 同じように、宋代士人が葬師の「良」「庸」や信頼度を 見極めるときもまた、 典籍の知識を身につけているか、 そして儒士のような学習態度をあらわしているかが、主 な観察と判定の基準となっていた。欧陽守道は別の地理 師宋義甫に贈った序文の中で、「予毎念ト地雖一芸、然 非留意於学, 安能通晓。吾儒読書終身方名為士, 術家倘 以卜地為業, 則亦孜孜講明, 如吾儒之読書可也79)」と儒 家にとって基本的な配慮と本位とすべき態度について余 すところなく語っている。 逆に、子供の頃に師匠から教 えを受けただけの、字も識らない地理師は信頼すること ができない「庸流」であるとした。南宋の士人魏了翁(1178 -1237) は風水師王彦正に贈った文章の中で、術士が経 典を理解することが、その専門知識と技能の体現するた めの基礎となることを強調した。さらに,「資中王生, 雖本以風水名家, 而心目曠遠, 善識統体。且能傅諸卦義, 裁之以理, 非史巫紛若之比800」とあるように, もしその 知識の範囲が風水葬書の伝統を超え、さらに儒家の経典 や義理まで引用して論証したならば、より信頼と敬服を 得られると述べた。「余一見而奇其有識。会離憂患、俾

営兆域,主賓一語乃決,不数月乃克襄事⁸¹⁾」と述べるように,まさに王生が広く知識を吸収していたために,魏 了翁は安心して家中の喪葬を彼に委託し,また順調にこの大事をやり遂げたのである。それだけではなく,魏了 翁は王生の出立前にこの文を著して,「夫王生善発山川 之悶,而人之得王生以発之,而俾死者有所帰,皆非偶然 也。生乎其敬之,重之毋忽⁸²⁾」と彼を推薦したのである。

多くの宋代士人が儒士の基準をもって風水術士を区別したため、儒者の特質を持つ者はよりいっそう士人の共鳴と信頼を得ることができた。前述のような書物の知識を身につけ、利益を求めない者のほかに、最もよく宋代士人に認められた術士、それは本人が儒者であった者や、かつて科挙受験を志した者であった。たとえば、南宋の著名な道学家陸九淵(1139-1192)は、地理師湯謨挙に贈った文章の中で、儒者出身の術士は往々にしてその言動が士人のそれと同じため、士人の支持を獲得しやすいことを述べている。

清江湯謨举,往年見過。占辞甚文,為礼甚恭。而挟地理之術,登象山図其形,殊不失実。相従之久,温然慈祥不少異。其初此来又以啓事見予,多経史全句,首尾詳整,類従事場屋者。問之,則曰:「旧亦応挙,屡不中乃舍之。地理乃先世之伝,姑業之以為生。」又出謝中丞詩,詩得謨挙素懷。既別,求予言,因覈書以贈。⁸³

陸九淵は湯謨挙と初めて面識をもったとき,彼は地理術に長じているうえに「占辞甚文,為礼甚恭」であると観察した。またそれ以後の長いつきあいの中でも,彼の文章を能くし礼に則った行動はいささかも変わることがなかったため,その出身の背景が一般の地理師と異なっているのではないかと疑った。それを尋ねたところ,果たして彼はかつて科挙受験を志していたが,幾度かの挫折の後に地理師に転業したことがわかった。陸九淵が彼について著した内容の多くが儒士然とした言動に集中しており,地理の方面で秀でていることにはほとんど言及していないことから,この文を贈った原因はおそらくその儒士としての特質にあったと思われる。実際に,陸九淵の前にも,彼は他の士人から詩を贈られたことがあった。おそらく彼は文人達の間で活動しており,少なからず文人の認知を得ていたのだろう。

このほか、南宋の士人程珌(1164-1242)は同郷の呉 炎のために撰した序文の中で、儒生としての本質をもつ 術士は往々にして術数の上でも優れた表現をし、また信 頼と交流に値することを強調した。また、彼は士人が「儒」 と「術」の両者を兼ね備える可能性や必要性についても 指摘した。というのも、古代では、儒者は本来天・地・ 人の知識を兼ね備えていたが、後に学と術に分かれ、儒 者の学問範囲が縮小してしまったからだとする。文中の 呉炎(程珌は進士と呼ぶ)はまさにその儒・術を兼ね備 えた君子であった。

里中呉君炎,一日来見。儼然衣冠鏘然,容止琅然, 論議則固儒生也。又一日以長牋為貺,展而視之,則出 入卦例,布列形勢。点龍発穴,覘風察水,則又有陰陽 家·老師宿学之所不及者。其謂世之儒者,不能兼而合 之乎?⁸⁴⁾

程珌は、この儒生の本質を備え、陰陽風水の術に通じる人物を、口を極めて賞賛している。また典範に秀でた儒者が術数の領域に手を伸ばすことについて、その可能性のみならず正当性をも主張している。実際に、程珌は言葉の上で呉炎を非常に賞賛した意外に、行動でも彼に対する重視と信頼をあらわしている。

予欲招而館之,使之解経紀史,抽発文思,為童幼師。 暇時休日,則与之登高涉流,歩龍岡而窺鳳穴。顧不一 挙而両獲哉!叩之呉君,則今歳已有他諾,無及矣。姑 志吾之所欲者,以俟他日焉未晚也。⁸⁵⁾

残念ながら、彼を館に招いて児童の教師とし、同時に彼とともに山川地理の状況を発掘するという程珌の計画は、すぐに実現することができなかった。その理由は前述の真徳秀や文天祥と同じく、彼はその年すでに他の約束があるため出立しなければならなかったからで、程珌の望むように残って奉仕することができなかった。それゆえに程珌は真徳秀や文天祥と同じように、「姑志吾之所欲者、以俟他日焉未晩也」と言うほかなかったのである。

多くの宋代士人が儒者の特質を備えていることを「良」 葬師を判定する基礎としたのと同じように、そうした基 準によって当時の社会に流行していた陰陽地理の書籍も 判定していた。前述のように、宋代において地理葬術の 書籍の普及は非常に早く、社会上に流通する著作も玉石 混淆といった状況であった。程頤の言った「後代陰陽家 流, 競為詭誕之説。葬書一術, 遂至百二十家86)」から欧 陽守道の言った「目中所見、亦不下二十余家、而鄙俚謬 妄, 一見而棄之者, 不計其数87)」までの叙述から, 士人 にとってまことに信頼するに足る葬書は決して多くなか ったことが見て取れる。そのため、いかにその善し悪しを 判断し、さらにはその著作に対して削除や編集を行うか が、宋代士人にとってもう一つの注目すべき課題となっ ていた。欧陽守道はかつて多くの誤りだらけの地理書の ほかに、理に明るい儒者が著したものと思われる一冊の 「良」地理書を見つけ出したと述べている。「自郭景純葬 書之外, 有一書最可人意。意其出於明理之儒者, 每愛玩 之。非特予愛玩之, 四方士大夫之能知地理者, 与之縦言

及此, 則毎毎誦之如流也。是書文辞真雅, 初無難曉88)」 と言っていることから、士人が術数の書籍を見分ける際、 その著者の「儒者」的特質や身分が重要であったことが わかる。残念なことに、欧陽守道はこの書名を文中で明 らかにしていないため、その内容にまで踏み込んで検討 することはできない。しかし、彼はその儒者によって著 された「明理之書」についてさらに踏み込んだ説明をし ており、世俗の間違いだらけの書と対比して「鄙俚繆妄 之書, 其徒易於伝習, 又便於田家市人之聴。其取信常衆, 得利常速。而明理之書, 探山川融結之情, 引経援史, 遠 及四方郡邑之大。勢可与識者道, 難与俗人言也89)」と述 べている。このほか、もう一冊彼が序文を撰した風水地 理の書があり、その著者も同じ学者(欧陽守道は贛進士 と呼んでいる)のものであった。欧陽守道はその書の巻 首に題字を書いたほか、「老菴士也、可与商900」とある ように、長らく懸案としていた自身の墓穴の問題につい て、この地理専門家廖老菴と相談する意をあらわしてい るが、その理由は彼が士人だったことにあった。

何夢桂は地理師王希声の著作『陰陽理学』に序を題した際、王希声の儒者身分と、この作品の信頼性との関係について述べている。このほか、その作品の内容と価値について分析するとき、何夢桂は士人としての観点や当時の学術界の思想的潮流が、彼らの術数書籍に対する評価に深く影響していることを述べている。このような要因が作用しているもとで、王希声の『陰陽理学』がなぜ何夢桂の賞賛を得ることができたかは理解に難くない。というのも、一つには彼が何夢桂によって儒者の流と見なされたからであり、二つにはその著作が書名から内容まで、南宋末年の思想界で次第に重要視されるようになった「理」説を一貫して強調しているからである。このような著作の傾向は、間違いなく多くの士人の興味を引き、認められていった。何夢桂の序文からは、こうした要因の作用を明らかに見て取ることができる。

王君希声儒家流也,少好山水,壮而益精。輯次諸家之 説,断之巳意,以成一書,名曰陰陽理学。徵余為序, 愚於理之説而有感焉。張而大之,非為荒唐誕謾,以欺 天下也。安得天下之知理如王君者,与之共談天地万物 之理於此書之外哉?壬申春仲書。⁹¹⁾

ここではまず、この地理書の作者である王希声はもともと儒者出身だが、幼い頃から山水の学に興味を持ち、それが年を経るにつれて次第に強くなっていったとしている。次に、この書物は王希声の原著ではないが、「輯次諸家之説」の後、「断之己意、以成一書」とする。ここから、王希声は儒者の知識と見識によって、編集の過程で削除や整理を行ったことがわかる。三つ目に、本書成立の過程で、王希声は当時流行していた儒家の「理」

説をその中に取り入れたとする。そしてまた、まさに一貫して「理」説を保持したために、何夢桂に評価され、そして、本書はその他の「荒唐誕謾」な術数書と明らかに区別された。最後に、何夢桂は王希声を「共談天地万物之理」と言って、彼をただの地理書の著者というだけでなく、知識の交流をして互いに切磋琢磨するに足る友人であるとしている。

実際には、社会に流通していた葬書を受動的に区別し ていた以外にも, 多くの士人たちは当時氾濫していた風 水葬書について積極的に改訂や編集整理を行うべきこと を意識し始めていた。風水術数にも道理があり、軽々し く廃止できないことから、その目的は、風水葬術を弾圧 し廃止することではなく,「亦宜原其正理, 取其要約, 去其邪誕之言, 集為正宗之書。使民間循而行之, 使不惑 於異説,不溺於他岐92)」とあるように,それを求める者 に対し理にかなった関連書籍を提供することにあった。 あるいは多くの儒士が葬書の分類や整理の仕事に携わっ た背景には、このような使命感があったのかもしれない。 たとえば朱熹の門人で親友であった蔡元定は、「是其書 自宋始出, 其後方技之家, 競相粉飾, 遂有二十篇之多。 蔡元定病其蕪雑、為刪去十二篇、存其八篇93)」とあるよ うに、葬書が広まっていく過程でその内容も蕪雑になり すぎてしまったため、改訂の作業を行ったとする。また 前述した宋末元初の呉澄も同様に、葬書流行の過程で低 俗な葬師によって間違った説が入り込んでしまい、真偽 を判別し難くなった体験から、それらを整理し改訂しよ うとしていた。その彼の意図は蔡元定による改訂でとど まるものではなかった。というのも、彼は蔡元定のやり 方は「未尽蘊奥94)」であるとし、「世所伝葬書、被庸謬 之流, 妄增猥陋之説, 以乱其真。予嘗為之刪定, 択至精, 至純者為内篇。其精粗·純襍相半者為外篇。其粗駁当去. 而姑存之者為雑篇⁹⁵⁾」というように、さらにその内容の 真偽の程度に応じて、内・外・雑篇に分類を行ったので ある。後代の士人にとってこうした儒者の言は、「然則 何以正之。亦正之以儒者之言可矣。晋之郭璞・唐之呂才・ 宋之蔡発・明之劉基、其言則儒者之言也。吾惟儒者之言 是信, 斯可以勿眩矣乎%」とあるように, 紛らわしい葬 書を修正するというだけでなく、信頼に値し、雑多な葬 書に惑わされないようにするための利器であった。

風水地理書の整理編纂に携わった以外にも、多くの士人が積極的に風水術数を学習し始めた。前述の欧陽守道はかつて、人の子たる者にとって「知医」のほか「知地理」もまた親に仕えるために必要な知識であると述べた。そして、後の知識人達もまた同様の観点を示しており、人々が禍福の説を盲信してすぐに葬らなかったり何度となく遷葬したりという状況を改善するための最も良い方法は「使人子皆通形家言、而勿惑於葬師拘牽穿鑿之説⁹⁷⁾」であるとした。欧陽守道はかつて地理の学を儒者の修める

べきものではないといって嘆いたが、宋代においては確 実に多くの士人がその重要性を実感しており、 積極的に 学習していた。現実的には、こうした人々の大半は葬師 に騙されないかと心配したり、葬師の説を受け入れるの を望まなかったりしたため、親族の墓葬が定まらず、そ のため積極的に葬書の説を探求し始めたのである。たと えば、北宋の士人劉摯(1030-1097)によれば、学者陳 孝嘗(1015-1082)は「将葬, 患葬師多拘, 因自究其書, 有所去取,以従事無違於礼980」というように、融通の利 かない葬師のために礼を違うことを恐れ、葬書の研究と 選択に没頭したとする。また、文天祥の母方の祖父であ る曾旺(?-1262)は、「初公先世重卜葬。葬師譸張為幻、 封鬒無定居。公憮然曰,吾詎忍吾先至此,吾不可自求之 乎。乃従兄瑾, 載資越境, 旁参博扣, 逾十年得其説以帰⁹⁹⁾」 とあるように、葬師による欺瞞を避けるため、兄の曾瑾 とともに十年以上の年月と多くの金銭を費やし、各所で 関連する地理術を学習した。その結果、「由是高曽而下、 一奠不再徙¹⁰⁰⁾ というように、その家中の葬地は順調 に決定し、二度と遷されることはなかったとする。

以上,本節での考察によって,宋代士人は「武学」・「医 学」等の国家社会の安否に関わるような知識領域のみに とどまらず、風水地理といった技芸の術に対しても強い 関心を持ち、密接に介入していったことが明らかになっ た。風水術が引き起こした喪葬の弊害に対して批判はあ ったものの、大部分の宋代士人がそれを排除まではしな い姿勢で葬術を扱っていた。反対に、彼らは術数関連の 書籍や術者を区別するようにつとめたばかりか、少なか らざる士人が様々な理由によって直接それに介入し、風 水地理の術を編集し、学習し、またそれを生業としたの であった。また同時に、多くの士人が個人的な興味や実 際の需要から地理の術を容認し、積極的に風水術士と密 接な往来をもったのである。この相互的な活動の過程で、 詩文の贈与によって風水地理の術に対する支持をあらわ し、また術者のために広く人的ネットワークを開拓して いったのである。またある者は、地理の知識が、親に仕 える子にとって必要なものであるばかりか、儒と術を兼 ねた古代の君子を体現するために備えるべき知識である ことを強調した。さらに儒者の特質を持つ者や儒からト に転向した者に対しては、より多くの承認とその優位性 を与えたのである。こうした事例から、風水の術は儒士 から常に小道末芸と見なされていたにもかかわらず、宋 代社会が実際に発展していく中において、それが単なる 技芸の士の持つべき専門知識や科挙受験に挫折した者の やむなき人生の退路では決してなかったということが明 らかである。逆に、多くの士人にとってすでにそれは実 用的な価値を有する技芸であり、敬服すべき職業であり、 「儒」・「術」を兼備し、「理」説を体現する重要な知識で あった。儒・術の区別が前者の介入と承認によって次第 に曖昧になっていくにつれ,両者の交流と相互活動も頻繁になっただけでなく,後者の社会的地位とイメージも 改善されていったのである。

おわりに

本稿では、宋代の風水術数およびその術者が、士人の 密接な関心と介入のもとで、次第に小道末芸という周辺 的地位から脱却し、儒者が備えるべき重要な知識の一つ となっていったことを明らかにした。この変化は士人の 認知の上のみならず,その行動にも具体的に現れていた。 また同様に,こうした術数を操る地理師も,一方で儒者 や儒者の特質を備える者がその中に身を投じたり、また 一方では士人顧客の志向に投合して積極的に自身の行動 や術数の内容を修正していったりしたことによって、士 人の彼らに対する評価を変化させていったのである。当 然ながら、こうした変化は宋代の歴史的発展と密接に関 係しており,政治構造の改変や社会流動の出現によって, 運命を操るとされる風水術数は拡大していく土壌を獲得 したのである。一方では、社会の各階層の注意を引きつ け、人々が社会的地位を改善する手段の一つとなった。 また一方では、需要の増加にともなって利益を得る余地 が生まれ、そのことがより多くの、また様々な社会背景 を持つ人々を引きつけ、営利の手段となっていったので ある。風水術数の流行に乗じていろいろな喪葬の弊害が 生じ、多くの士人によって厳しく批判されたものの、そ れに参与し支持する者、風水の術によって境遇の改善を 図る者、それを生業とする者たちの中には、多くの士人 が含まれていた。このような矛盾した現象の存在は、宋 代士人の中で風水地理の術に対する共通認識がいまだ形 成されていなかったことを示しているようにみえる。し かしながら, 賛成と反対両者の態度と行動を詳細に観察 すると、彼らの間にはやはり共通する部分があることが わかる。というのも、批判の立場をとる者の中にも、徹 底してそれを排除し禁止する手段をとる者は少なかっ た。また、同情や支持の立場をとる者もまた、適切にそ れを見分けて、選択的に受容し、認知するべきであると 考えていた。言い換えれば、宋代以降の士人による風水 術数や術士に対する批判は止むことがなかったけれど も、一部の術数や術士はその認知のもとで、存在する空 間と合理化された地位を獲得していたのである。

宋代士人の関心と積極的な介入から,風水術数の発展はまさに医学や武学の領域と同じく,深く「儒化」の影響をうける傾向にあった。とはいえ,儒学の力が介入する過程で,士人のとる立場が,儒者が卜者になることを強調する立場から,卜者が儒者的な風格を身につけることを強調する立場へと変化したのかどうかについて,は

っきりと結論を出すことは難しい。実際に、これまで多 くのト葬に関する論述と個別の事例を通して、儒士と術 士が絶えず互いに影響し合っていたことを見てきた。儒 士たちが個人的興味や生活上の必要性、あるいは教化の 目的で風水術数の領域に身を投じたために、術士たちの 社会的背景が多元化し、その専門技術を発揮する際にも 儒学の浸透が見られるようになった。同時に、術士たち はより大きな利潤を求め、士人の顧客に接近していった。 彼らは士人の顧客に直接奉仕して収入を獲得したほか、 その発揮する技芸も、士人階層やその文化へと接近して いった。その目的は、士人の認知を獲て、さらにその広 い人的ネットワークとその詩文による評価を通して、直 接的には利益を、間接的には名声を拡大することにあっ た。このような絶え間ない相互交流のもとで、儒士と術 士の認知と実践が変化してゆき、「儒」・「術」間の境界 線も次第に曖昧になっていった。こうして二者間の文化 的・社会的距離は縮まり、多くの儒者がその中に身を投 じただけでなく、術者の社会的・文化的地位も上昇し、 同時に各自の文化的な様相も再構成されていったのであ る。こうした変化は、宋代社会における地位上昇のルー トを改めて説明するものである。つまり、国家や社会の 認める「士」になる以外に、士と密接に往来しその認知 を受けることも、明らかに自身の地位を改善する道であ った。宋代の医者・武将がそうであったように、風水地 理師もまた同様の経験を持ち、その行動によって体現し ていったのである。最後に、宋代士人が医や卜等の技芸 知識に関与しそれを認知していったことは、後に活路を 閉ざされた元代十人が大量にこの知識領域に身を投じる ための基礎となったことを述べておく。

※本稿は2007年1月22~23日に高知大学で行われた科研 費基盤研究(B)「墓より見た中国宋代の社会構造」研 究会での報告を基としている。

謝辞

中華民国国家科学委員会の本研究に対する支持と賛助 に感謝する。また、研究会に招聘していただいた平田茂 樹・遠藤隆俊両教授と、本稿を翻訳していただいた上内 健司氏にも同じく感謝の意を表するものである。

注

- 1. 何暁昕・羅雋『風水史』(上海文芸出版社,1995年),89-135頁。 王玉徳『神秘的風水』(広西人民出版社,1991年),43-60頁。 張明喜『洩漏的天機-中国相術与命学-』(中華書局,1990年), 20-29頁。竺沙雅章「宋代の術士と士大夫」(『宋元仏教文化史 研究』汲古書院,2000年),479-493頁。
- 2. John W. Chaffee, "[Review] Powerful Relations: Kinship, Status, and the State in Sung China (960-1279)" (Harvard

- Journal of Asiatic Studies (以下 HJAS) 60-1, 2000年), 277-289
- 3. 劉祥光「両宋士人与卜算文化的成長」(蒲慕州主編『鬼魅神 魔一中国通俗文化側写一』(麥田出版社, 2005年), 221-277頁。 前述竺沙雅章論文,479-493頁。廖咸恵「祈求神啓-宋代科挙 考生的崇拝行為与民間信仰」(『新史学』15-4,2004年),41-92頁。 Hsien-huei Liao, "Exploring Weal and Woe: The Song Elite's Mantic Beliefs and Practices" (T'oung Pao 91. 4-5, 2005年),
- 4. たとえば、司馬光『伝家集』(『景印文淵閣四庫全書』台湾商 務印書館, 1983年, 第845冊所収) 巻65, 18a-20a頁。羅大経『鶴 林玉露』(中華書局, 1997年) 巻6, 丙編, 344-345頁。
- 5. 最も早い時期のものとしては、内藤湖南「概括的唐宋時代観」 (『日本学者研究中国史論著選訳(一)』中華書局, 1993年), 10-18頁。宮崎市定「東洋的近世」(同上), 153-242頁。近年では, 柯睿格(John Winthrop Haeger)「宋代社会一在伝統之内的変 遷一」(『宋史論文選集』 国立編訳館, 1995年), 1-12頁。包弼 徳「唐宋転型的反思-以思想的変化為主-」(『中国学術』3, 2000年), 62-87頁。柳立言「何謂「唐宋変革」?」(『中華文史 論叢』81,2006年),125-171頁。張国剛「「唐宋変革」与中国 歷史分期」(『史学集刊』1,2006年),8-10頁。台湾大学歷史学 系編『転変与定型一宋代社会文化史学術研討会論文集一』(国 立台湾大学歷史学系, 2000年)。Robert P. Hymes, Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-Chou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung (Cambridge University Press, 1986年)。John W. Chaffee, The Thorny Gates of Learning in Sung China (New York: Cambridge University Press, 1985年)。Luo Yinan, "A study of Changes in the Tang-Song Transition Model" (Journal of Song-Yuan Studies 35, 2005年), 99-127頁。また、『唐 研究』第11巻「唐宋時期的社会流動与社会秩序研究専号」(北 京大学出版社,2006年)に収録されている多くの論文。そして 最近台湾中央研究院所で開催された「唐宋社会変遷討論会」 (2006年9月4-5日) でなされた討論など。
- 6. 宋会群『中国術数文化史』(河南大学出版社, 1999年), 316-327頁。
- 7. 前述内藤湖南論文, 10-18頁。
- 8. Hymes は宋代撫州の士人の研究において、すべての進士が 地方士族出身であることを指摘し、寒門から一躍官界へと入る 可能性について疑問を投げかけている(前掲Robert P. Hymes 著書, 29-61頁)。しかし,正史の列伝にはわずかながらそうし た事例が見られる。たとえば、仁宗景祐年間(1034-1038)に 進士となった何渉は「父祖皆業農, 渉始読書…」(『宋史』 鼎文 書局、1983年、巻432、1284-1285頁)とある。
- 9. 陶晋生『北宋士族-家族・婚姻・生活』(中央研究院歴史語言 研究所, 2001年)。黄寬重『宋代的家族与社会』(東大図書, 2006 年)。前掲Robert P. Hymes 著書。Beverly Bossler, Powerful Relations: Kinship, Status & the State in Sung China (960-1279) (Harvard University Press, 1998年)。
- 10. 前揭包弼徳論文, 62-87頁。Robert Hartwell, "Demographic, Political and Social Transformation of China, 750-1550"(HJAS 42-2, 1982年), 365-442頁。
- 11. それに参加した者について言えば、及第し成功する機会は激 減したが、科挙教育を受け科挙に参加したことによって、「士」 としての身分を取得し維持することができた。それゆえに彼ら は継続して投資することを望み、またそうした家族への援助に 尽力したのである。このような分析についてはPeter K. Bol, "The Examination System and the Shih" (Asia Major Third Series 3-2, 1990年), 149-171頁を参照のこと。
- 12. 宋代士人の政府における役割についての論争および宋代の政 治潮流の変化については、Conrad Schirokauer, Robert Hymes,

- eds., Ordering the World: Discourses on Government and Policy during the Sung (University of California Press, 1993年)を参 照のこと。
- 13. 武学についての研究は、次の研究を参照のこと。方震華「文 武糾結的困境-宋代的武挙与武学-」(『台大歴史学報』33, 2004年)、1-42頁。呉九龍・王菡「宋代武学武挙制度考述」(『文 史』36, 1992年), 233-248頁。楊康蓀「宋代武挙略述」(『中国史 研究』3,1985年),49-61頁。趙冬梅『武道彷徨一歴史上的武挙 和武学-』(解放軍出版社,2000年)。宋代の儒医についての研 究は以下の研究を参照のこと。陳元朋「宋代的儒医一兼評Robert P.Hymes有関宋元医者地位的論点—」(『新史学』6-1, 1995年), 179-203頁。Angela Ki-che Leung, "Medical Learning from the Song to the Ming" (Paul Jakow Smith & Richard von Glahn, eds., The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History (Harvard University Asia Center, 2003年) 所収), 374-398頁。 祝平一「宋・明之際的医史与「儒医」」(『中研院歴史語言研究 所集刊』77-3, 2006年), 401-449頁。
- 14. 前述方震華論文参照。
- 15. 同上。
- 16. 宋代における医学の発展の背後にある原動力について、皇帝 の役割を強調した研究として、次の二論などがある。 葉鴻灑『北 宋科技発展之研究』(銀禾出版社,1991年),頁189-224。鄭志 敏「略論宋代的医学教育」(『大陸雑誌』100-2, 2000年), 22-40頁。 また, 有為政府の概念の影響を強調した主要な研究としては, TJ Hinrichs, "The Medical Transformation of Governance and Southern Customs in Song Dynasty (960-1279 C.E.)" (Ph. D. diss., Harvard University, 2003年), 20-60頁が挙げられる。
- 17. 前述陳元朋論文参照。
- 18. 前述 Angela Ki-che Leung 論文及び前述陳元朋論文参照。
- 19. 宋代における各種ト算術士の活動とその士人への追求につい ては、前述 Hsien-huei Liao 論文、前述劉祥光論文、及び前述 竺沙雅章論文参照。
- 20. 洪邁『夷堅志』(明文書局, 1982年) 支戊, 巻2, 1064頁。
- 21. 袁文『甕牖閒評』(上海古籍出版社, 1985年) 巻8, 86頁。
- 22. 関連する史料は以下にも見える。何遠『春渚紀聞』巻5,81頁。 陸游『老学庵筆記』(中華書局, 1997年) 巻10, 134頁。周密『癸 辛雑識』(中華書局, 1997年), 続集下, 188頁。周召『双橋隨筆』 (『景印文淵閣四庫全書』第724冊所収)巻6,22b-23a頁。
- 23. 陶成等『江西通志』(『景印文淵閣四庫全書』第513-518冊所収) 巻110, 32a-32b頁。黄秀顔「地巻与柏人一宋元江西民俗芻探一」 (『中国文化研究所学報』5-6, 1997年)。そのほか、積極的に風 水陰陽家の言を信じ、択地や択日に尽力して幸福を求めた事例 としては、次のような史料がある。葉適『葉適集』(中華書局、 1987年) 巻25,506-507頁。洪邁『夷堅志』 三壬, 巻1, 1470-1475頁。洪適『盤洲文集』(『景印文淵閣四庫全書』第 1158冊所収) 巻33, 6a-12a頁。
- 24. こうした警告と危機回避の事例としては、たとえば洪邁『夷 堅志』支庚, 巻3, 1156-1157頁などがある。
- 25. 張大亨本人は元豊乙丑年(1085)に乙科に登り、その父通直 公は熙寧癸丑年(1073) に登第し、その兄大成は大観己丑年 (1109) に甲科に合格し、そしてその弟大受は重(宣)和辛丑 (1121) にまた乙科に合格している。
- 26. 何遠『春渚紀聞』(中華書局, 1997年) 巻1, 4-5頁。同様の事 例は以下にも見える。洪邁『夷堅志』支庚, 巻3, 1182頁。王 明清『揮塵録』(『景印文淵閣四庫全書』第1038冊所収)三録, 巻3, 8a-8b頁。
- 27. 何遠『春渚紀聞』巻2, 28-29頁。
- 28. 劉詵『桂隠文集』(『景印文淵閣四庫全書』第1195冊所収) 巻2, 15a-16a頁。

- 29. Edward A. Kracke, "Sung K'ai-feng: Pragmatic Metropolis and Formalistic Capital," (*Crisis and Prosperity in Sung China* (University of Arizona Press, 1975年)所収), 53頁。前掲John W. Chaffee 著書, 61-65頁。
- 30. 前掲Beverly Bossler 著書, 35-77頁。
- 31. 南宋期に地方エリートが大幅に増えたことについての議論は、以下の文献を参照のこと。前掲 Robert Hartwell 論文、365-442頁。前掲 Robert P. Hymes 著書。及び、前掲 John W. Chaffee 書評、277-289頁。士人の地方アイデンティティが次第に形成されていったことについては、「中国近世教育与地方発展」国際研討会(台大東亜文明中心、2005年)において発表された Anne Gerritsen, "Learning in Luling: A Preliminary Look at Local Education and the Development of Song-Yuan-Ming Luling"を参照。
- 何夢桂『潜斎集』(『景印文淵閣四庫全書』第1188冊所収)巻5, 4b-5a頁。
- 33. 同上。
- 34. 同上。
- 袁樹珊『中国歴代ト人伝』(新文豊出版社,1988年)第15巻, 486-487頁。
- 36. 熊禾『勿軒集』(『景印文淵閣四庫全書』第1188冊所収)巻1, 25a-26a頁。
- 37. これまでの研究においてなされた大まかな計算によると,こうした作品は前期の詩作の五分の一ほどを占めている。張公鑑『文天祥生平及其詩詞研究』(台湾商務印書館,1989年),114-116 頁。
- 38. 同上。
- 39. 前掲劉祥光論文, 221-227頁参照。
- 40. 文天祥『文山集』(『景印文淵閣四庫全書』第1184冊所収)巻13. 17b-18a頁。
- 41. 文天祥『文山集』巻13, 26a-27b頁。
- 42. 同上。
- 43. 同上。
- 44. 胡直『衡廬精舍蔵稿』(『景印文淵閣四庫全書』第1287冊所収) 巻16, 10a-10b頁。劉宗周『人譜類記』(『景印文淵閣四庫全書』 第717冊所収)巻下, 46b頁。
- 45. 何蘧『春渚紀聞』巻1,4頁。「白鶴書院」もまた同様の状況下で建設された。魏了翁『鶴山集』(『景印文淵閣四庫全書』第1172-1173冊所収)巻92,34b-36a頁参照。後代にもまた同様の事例がある。たとえば明代の吏部尚書楊襄毅公はかつて「我曷為私之」といい,所有する吉地を文昌祠の建築場所として提供した。王世禎『池北偶談』(『景印文淵閣四庫全書』第870冊所収)券9,20b-21a頁。
- 46. 徐乾学『読礼通考』(『景印文淵閣四庫全書』第112-114冊所収) 巻83, 27a-28b頁。
- 47. 徐吉軍『中国喪葬史』(江西高校出版社, 1998年), 453-454頁。
- 48. 永瑢·紀昀等『欽定四庫全書総目』(『景印文淵閣四庫全書』 第1-5冊所収) 巻109, 1b-4a頁。
- 49. 程顥・程頤『二程文集』(『景印文淵閣四庫全書』第1345冊所収) 券11. 6a-8b頁。
- 50. 呉澄『呉文正集』(『景印文淵閣四庫全書』第1197冊所収)巻 23, 11a-12a頁。
- 51. 陳櫟『定字集』(『景印文淵閣四庫全書』第1205冊所収)巻9, 34b-38a頁。
- 52. 清人の徐乾学は時系列に従って宋代の司馬光・二程兄弟・陳 博良・張九成・真徳秀・羅大経・熊朋来ら,及び元・明の多く の学者を列挙している。徐乾学『読礼通考』巻83,15a-36a頁。
- 53. 司馬光『伝家集』巻65, 18a-20a頁。
- 54. 同上。

- 55. 陳傅良『止斎集』(『景印文淵閣四庫全書』第1150冊所収)巻 48. 6b-8b頁。
- 56. 楊萬里『誠斎集』(『景印文淵閣四庫全書』第1160-1161冊所収) 卷72. 13a-14a頁。
- 57. 司馬光『伝家集』巻65, 18a-20a頁。
- 58. 程顯·程頤『二程遺書』(『景印文淵閣四庫全書』第698冊所収) 卷22上, 21b頁。
- 59. 韓琦『安陽集』(『景印文淵閣四庫全書』第1089冊所収)巻2, 12b-13b頁。
- 60. 陳櫟『定字集』巻7, 17b-21b頁。同書巻9, 34b-38b頁。
- 61. 陳櫟『定字集』巻9, 34b-38b頁。
- 62. 司馬光は諫官時代に「嘗奏乞禁天下葬書」と述べているように、宋代の儒者の中でもごく少数派である葬書根絶論者であった。司馬光『伝家集』巻65, 18a-20a頁。そのほか、明代の呂坤もまた同様の見解を示し、「不火其書、礼法不行」と述べている。徐乾学『読礼通考』巻83, 29a-29b頁。
- 63. 程顥·程頤『二程文集』巻11, 4a-5b頁。
- 64. 同上。
- 65. 董鼎『孝経大義』(『景印文淵閣四庫全書』 第182冊所収), 24a頁。
- 66. 柯尚遷『周礼全経釈原』(『景印文淵閣四庫全書』第96冊所収), 「周礼通今続論」, 17a-17b頁。
- 67. 朱熹『晦庵集』(『景印文淵閣四庫全書』第1143-1146冊所収) 卷63. 37b-40b頁。
- 68. 同上。
- 69. 徐乾学『読礼通考』巻83, 25b-26a頁。
- 70. 葉適『水心集』(『景印文淵閣四庫全書』 第1164冊所収) 巻 12. 6a-7a頁。
- 真德秀『西山読書記』(『景印文淵閣四庫全書』第705冊所収)
 卷11,55b-58b頁。
- 72. 司馬光『伝家集』巻65, 18a-20a頁。羅大経『鶴林玉露』巻6, 丙編, 344-345頁。
- 73. 司馬光『伝家集』巻65, 18a-20a頁。
- 74. 真徳秀『西山文集』(『景印文淵閣四庫全書』 第1174冊所収)
 卷27. 14b-15a頁。
- 75. 欧陽守道『巽斎文集』(『景印文淵閣四庫全書』第1183冊)巻8, 8a-8b頁。
- 76. 欧陽守道『巽斎文集』巻8, 10b-12a頁。
- 77. 同上。
- 78. 李義山は欧陽守道に対して、特に地理葬術の分野において、 多大な影響を与えた。たとえば、欧陽守道が別の地理師廖老菴 に贈った撰文においても、李義山がこの地理師と知己であるこ とに言及している。彼がその地理書に題字を贈った理由も、「先 生(李義山)命予題数字於巻首」としている。欧陽守道『巽斎 文集』巻18, 9a-10b頁。
- 79. 欧陽守道『巽斎文集』巻11, 6b-8b頁。
- 80. 魏了翁『鶴山集』巻92, 32a-33b頁。
- 81. 同上。
- 82. 同上。実際にはこの史料の他にも、魏了翁の文集には王生に贈った別の一篇の文章が収録されている。ここから魏了翁がこの風水術士に深く敬服し、彼を認め、感謝していることがわかる。魏了翁『鶴山集』巻92、34b-36a頁。
- 83. 陸九淵『象山集』(『景印文淵閣四庫全書』第1156冊所収)巻 20. 11a-11b頁。
- 84. 程球『洺水集』(『景印文淵閣四庫全書』 第1171冊所収) 巻8, 18b-19b頁。
- 85. 同上。
- 86. 程顥・程頤『二程文集』巻11. 6a-8b頁。
- 87. 欧陽守道『巽斎文集』巻11, 6b-8b頁。

- 88. 同上。
- 89. 同上。
- 90. 欧陽守道は史料中で廖老菴を「贛進士」といい、文末でもまた「士」と呼んでいることから、この地理師は儒士身分を有していたと思われる。欧陽守道『巽斎文集』巻18,9a-10b頁。
- 91. 何夢桂『潜斎集』巻5, 15b-16b頁。
- 92. 柯尚遷『周礼全経釈原』,「周礼通今続論」, 17a-17b頁。
- 93. 永瑢·紀昀等『欽定四庫全書総目』巻109, 1b-4a頁。
- 94. 同上。

- 95. 呉澄『呉文正集』巻23, 12a-12b頁。
- 96. 朱彝尊『曝書亭集』(『景印文淵閣四庫全書』第1317-1318冊 所収)卷35,14a-15a頁。
- 97. 陶成等『江西通志』巻139, 4a-6b頁。
- 98. 劉摯『忠粛集』(『景印文淵閣四庫全書』 第1244冊所収) 巻 14, 15b-17a頁。
- 99. 文天祥『文山集』巻16, 15a-18b頁。
- 100. 同上。

Burial and Geomancy: The Social Status of Song Geomancers

Hsien-huei LIAO

Through examining the development of geomancy and the role which the elite played in it, this study aims to explore the interactions between Confucianism and practical arts during the Song period. The foci of the discussion is on how these interactions impacted on Song geomancers' social status, on Confucian elite's attitude toward geomantic knowledge, and on the alleged distinction between "Confucian learning" and "practical arts." This study suggests that along with the increasingly intensive concern and involvement of the Song Confucian elite, geomancy gradually shook off such marginal status as "xiaodao 小道 (byway)" and "moyi 末藝 (lesser art)" and became part of the prerequisite knowledge that Confucian elite had to possess. This shift manifested itself not only in the elite's changing recognition, but also in their practical actions. Similarly, in order to attract elite clients' attention, geomantic experts endeavored to adjust their technical performance to elite cultural preference, which in turn contributed to the changing judgment of the elite on them. The changes occurred in both elite and mantic circles and helped abridge the perceived social and cultural gap between them, and reshape their cultural characteristics. It is worth noting that the Song elite's participation in and recognition of geomancy as well as other practical arts paved the way for their Yuan counterparts to undertake tasks in the related realms.

Keywords: burial, geomancy, social mobility, Song elite, geomancer